

修士論文

江戸川乱歩『黒蜥蜴』試論

↳ 多様な観点における考察

弘前大学大学院教育学研究科

教科教育専攻

○九GP二〇四

福田 裕子

目次

はじめに

第一章 作品について

第一節 初出・初刊

第二節 梗概

第三節 三島由紀夫による補助線

第二章 「明智小五郎」をめぐって

第一節 明智の変遷

第一項 初期

第二項 移行期

第三項 安定期

第二節 『黒蜥蜴』のトリック

第三章 「女」をめぐって

第一節 黒蜥蜴

第一項 黒蜥蜴という女

第二項 黒蜥蜴と雨宮潤一

第二節 桜山葉子

第四章 作品をめぐって

第一節 構成

第二節 挿絵

おわりに

テキスト、参考・引用文献一覧

はじめに

本論は江戸川乱歩原作『黒蜥蜴』の全体についての考察である。三島由紀夫作戯曲『黒蜥蜴』にみる原作小説の評価、主要登場人物である明智小五郎の『黒蜥蜴』までの変遷、黒蜥蜴のみならずその周辺人物についての考察をすることで、小説の全体像を多面的に捉え考察する。更に、作品全体がどのような構成になっているかを、登場人物を通して考察することにより、より深く小説を理解していくことを目的とする。

江戸川乱歩『黒蜥蜴』が高い知名度を勝ち得ているのは、三島由紀夫による戯曲化と、その戯曲が美輪明宏の当たり役となつて何度も上演されている影響が大きい。三島は戯曲化するにあたり、原作の根底にあるわずかな恋愛要素を前面に押し出したとしている。つまり、原作の小説に存在していた恋愛要素という魅力を戯曲という形で具現化し、世に知らしめたと考えることができる。しかし私は、原作の小説には恋愛以外にも読者をひきつける魅力があるのではないかと考え、原作の小説の持つ魅力とは一体どのようなものであるか。『黒蜥蜴』に関するこれまでの研究を振り返ると、一人の女性として黒蜥蜴を取り上げたものや、三島の戯曲と対比して論じられているものが多く、『黒蜥蜴』全体の特徴やトリック、他の登場人物に焦点を当てて論じられているものが少ない。本研究では、主要人物である明智小五郎の『黒蜥蜴』までの変遷を詳しくたどるとともに、『黒蜥蜴』におけるトリックや他の登場人物についても、その魅力を考察するものである。

『黒蜥蜴』には二人の女性が登場する。黒蜥蜴は謎の多い女性として登場するが、初出の雑誌では年齢や容姿が語られており、またその大胆な性格が垣間見られるような行動が語られている。その大胆さとは裏腹に、黒蜥蜴は常に孤独であり、自らの孤独を癒すかのように美しいものを収集し、明智との騙し合いを楽しむのである。そこにほのかな恋愛を感じることができるといふ特徴がある。もう一人の女性は桜山葉子である。小説の三分の二を占めるほど登場するのだが、替玉という役割のためか、今まで注目されることがなかった女性である。しかし、小説の大きな部分を占める以上、『黒蜥蜴』という小説は桜山葉子の冒険活劇として捉えることもできるであろう。

第一章 作品について

第一節 初出・初刊

雑誌『日の出』（新潮社）に昭和九（一九三四）年一月から十一月まで（三月は乱歩の都合により休載）連載された。同年一二月、新潮社より『黒蜥蜴・妖虫』として刊行された。

『日の出』は、大衆雑誌として、昭和七（一九三二）年八月〜昭和二十（一九四五）年十二月まで新潮社より発行された。従来、純文芸ものの出版を主とした新潮社が雑誌界の大衆的動向の顕著化に伴い、大衆文芸の分野に進出し創刊した雑誌である。長編小説では江戸川乱歩のほかに横溝正史や石坂洋次郎が執筆し、好評を博した¹⁾。

『黒蜥蜴』という小説は、単行本では見られない文章が初出の雑誌に存在する。初出にあつて単行本にない文章が掲載されているのは、二月号から十一月号までである。初出にしか存在しない文章の特徴として、一月号にはそのような文章がないこと、各号の冒頭部分に初出のみの文章が存在することとが挙げられる。雑誌『日の出』が月刊誌であるということと踏まえると、初出にしか存在しない文章は、前回のあらずじという位置づけになるであろう。

しかし、前回のあらずじにしては、あらずじ以外の要素が多分に含まれているような文章となつている。特に黒蜥蜴自身に関する描写が多いようである。ここでは、この初出のみに存在する文章における黒蜥蜴の描写について考察する。

初出における黒蜥蜴の描写について、以下に引用する。（内は号数。（引用における傍線は引用者による。以下同様。改行するにあたり、／を用いた。以下同様。）

¹⁾ 小田切進編『日本近代文学大事典第五卷 新聞・雑誌編』 昭和五十二年十一月 講談社

(二月号)

彼女の本名も、素性も、誰も知るものはなかった。その都の暗黒街では、彼はダーク・エンジェル、黒天使、黒蜥蜴などと様々に呼ばれ、たぐひなき美貌と、おびたぐしい装身具の寶石と、大膽不敵な裸踊りによつて、不良紳士たちの渴仰の的となつていた。／又、その夥しい寶石の装身具や贅澤至極な生活ぶりによつて察するに、彼女は、美貌と膽力と、手腕に加へて、莫大な資力を擁してゐるのに違ひなかつた。イヤ、そればかりではない。彼女は到る所に、T大學の事務所の中にさへ、有力な子分を持つてゐた。²

美貌と胆力と手腕と莫大な視力を擁している、素性の知れない女としての黒蜥蜴が、読者に対して印象付けられるような文章である。

(四月号)

社交界に出でゝはダーク・エンジェルと持囃される黒天使、ナイト・クラブの舞踏室では、大膽不敵の裸體舞踊で知られた一個の美人露出狂、そのむつちりとした二の腕の刺青を見れば、黙阿彌好みの女賊「黒蜥蜴」。／彼等が餌食と狙ふのは、同じホテルに投宿してゐる大阪の大寶石商岩瀬庄兵衛氏の令嬢早苗さん、このお嬢さんを誘拐した上囚にして、岩瀬氏が所有するこの國最大のダイヤモンドを奪はうといふ、大それた陰謀をたくらんでゐたのだ。／イヤ、ダイヤモンドばかりではない。囚に使用したお嬢さんも、そのまゝ返す積りはなく、これも一個の生きた美術品として、「黒蜥蜴」の寶庫に納めて置かうといふ魂膽らしい。エキシビジョニストの緑川夫人は、兼ねて稀代の美術蒐集狂であつたのだ。

黒蜥蜴は、大胆不敵な性質の美人露出狂でありエキシビジョニストであり美術収集狂。更に、誘拐した早苗を自分のコレクションに加えようとする。

(五月号)

「女アルセーナ・リウ・パン」後日新聞紙は彼女をそんな綽名で呼んだ。／黒づくめの洋装が非常によく似合う女。その黒衣の下には、裸體舞踊を得意とする臍肉が、どんな皮肉屋のダンディ・ボーイをも沈黙せしめる、非の打ちどころのない美しさで、艶かしく包まれてゐた。／暗黒街の女王。ナイト・クラブの天使。美しい身體中を寶石で飾つた女富豪。そして、大それた美術蒐集狂の女賊「黒蜥蜴」。／桃色の燈の下で、彼女がああ不思議な踊を踊るとき、白くてすべつこい二の腕を、一匹の不気味な黒蜥蜴が生きて這ひ廻るのだ。黒蜥蜴の刺青、このおぞましい入墨子こそ、彼女の全體を、最もよく象徴してゐた。

女アルセーナ・リウ・パンと新聞記者から評される。非の打ちどころのない美しい肉体を持つ、暗黒街の女王であり、女富豪色白で二の腕に黒蜥蜴の刺青。黒蜥蜴が彼女の全体を表現、トカゲは尻尾を切られても死なない。また生えてくる。つまり、何度でも這い上がる執念深さを持つ女性であると解釈できる。

(六月号 初出のみの文章なし)

(七月号)

外でもない、この怪犯人こそ「女魔術師」「女アルセーナ・リウ・パン」「黒衣婦人」などのないうたはれた、稀代の女賊「黒蜥蜴」であつた。／まだ三十になるかならぬ美貌の妖婦。うつくし

い裸體舞踊の名手。暗黒街社交界の女王。名もわからぬ。住家も知れぬ。その癖至るところに屈強な男の部下をもち、身につけた寶石だけでも巨萬の富を所有する、身變不思議の女性。彼女は美術蒐集家を以て自任し、どこかしらに盗品美術館をさへ設けてゐるらしく、今度の早苗さん誘拐も、若しかしたら、この女賊にとつては、一つの生きた美術品蒐集であつたかもしれないのだ。

稀代の女賊、三十になるかならないかの美貌、身辺不思議の女性。黒蜥蜴の年齢がわかる表現がされている。年齢を表記することで、黒蜥蜴という女性についてのイメージを読者がしやすくなると考えられる。

(八月号 初出のみの文章に、黒蜥蜴に関する描写の部分なし)

(九月号 初出のみの文章に、黒蜥蜴に関する描写の部分なし)

(十月号)

地上は毀れかゝつた空き工場、庭には雑草が蓬々と生え茂つて、まるで化物屋敷同然の建物だが、その工場のなかの祕密通路から、一度地底の穴藏に降りると、そこには、どんな美術館も及ばぬ豪華と怪奇の蒐集品が女賊が半生を費やして盗み集めた寶石、繪畫、彫刻などが、目もあやに陳列されているのだ。／イヤ、そればかりではない。その美術館の第一の呼物は、人類なのだ。若い男や女が、生きたまゝ、或は剥製にされて、黒蜥蜴にとつては最高の美術品として、大切に保存してあるのだ。つまりこの稀代の女賊は物を盗むばかりではなく、人を盗んだ。それも人身賣買などの爲でなく、人間の美しさを味ひ楽しむ爲に盗むのだ。／これらの地下建造物は、女賊黒蜥蜴が、盗み貯めた莫大な資本と、營々十餘年の辛苦になるものである。

美しい人を美しいまま保存したい。それとも、自分より美しい人間が存在するのは許せないのだろうか。こつこつと盗みをかさね、資金を増やした。地底美術館を作るために十餘年間苦勞している。女賊という仕事を始めたのは十餘年前、つまり、十六・七のころから黒蜥蜴として暗黒街を駆け回っていたと考えられる。

(十一月号)

女アルセーヌ・ルパン、暗黒街の女王、思ふ事ならざるはなき才智と財力と美貌を誇る女賊黒蜥蜴にも、運命の終焉が近づきつゝあるかに感じられた。／黒蜥蜴は部下の雨宮潤一青年を探した。こんな時相談相手は彼の外になかつたし、剥製人形を水槽へ抛り込むといふ疑わしい所業をしたのも潤一青年であつたからだ。

自分の思い通りに物事を運ばせる才智と財力と美貌を持っている。部下はたくさんいるが、いざというとき何か相談できる相手が潤一青年しかいない。潤一青年とは知り合ひではあつたが、部下として行動を共にしてきたのは半月ほどにしかない。孤独を抱えた女性。

初出にしか存在しない文章には、黒蜥蜴の人物像に関する描写がよく見られる。黒蜥蜴の年齢や世間での評判も毎回のよう描写されていた。しかし、連載が進むごとに黒蜥蜴に関する描写やあらすじそのものの行数も少なくなっている。八月号・九月号はあらすじのみの文章となつていことから、始めの二、三ヶ月かで黒蜥蜴のイメージが読者に植え付けてられてしまうということではないだろうか。そして読者は、言われずとも黒蜥蜴という女賊についてイメージし、小説を読み進めていくことができるのではないだろうか。初出にしか存在しない文章は、前回のあらすじを紹介するこゝと、読み始めの早い段階で黒蜥蜴という女性のイメージを定着させる役割を持つと考える。

第二節 梗概

左二の腕に蜥蜴の刺青を這わせた美貌の黒衣婦人は、暗黒街の女王として君臨し、実は女賊として暗躍する黒蜥蜴である。黒蜥蜴は、「この世のうつくしいものという美しいものを、すっかり集めて見たいのがあたしの念願なのよ。宝石や美術品や美しい人や、……。」と自分の盗賊としての目的を潤一青年に告白する。ただし、「不意打ちなんて卑怯なまねはしたくない。」と、物を取ることでより戦いに価値を見出す。

今回の狙いは、岩瀬氏の所有する日本一のダイヤモンド『エジプトの星』と令嬢の早苗を盗み出すこと。そして、岩瀬氏に雇われた名探偵・明智小五郎を倒すことである。

黒蜥蜴は、岩瀬氏親子が東京のホテル滞在中に早苗誘拐を試みるも、明智に邪魔され、誘拐は失敗に終わる。明智は黒蜥蜴を捕えようとするも、自らの失策により黒蜥蜴を逃してしまふ。

その後、大阪に戻った岩瀬親子に黒蜥蜴は再び襲いかかる。早苗の誘拐に成功した黒蜥蜴は、早苗との引き換えに『エジプトの星』を要求する。通天閣を取引場所とし、黒蜥蜴は念願であった『エジプトの星』を手に入れる。そして売店の女将と入れ替わり、その店主と手を取り合い逃走する。実はこの売店の店主は変装した明智であり、明智はそのまま黒蜥蜴を尾行する。

黒蜥蜴は人質である早苗を伴い海路で逃亡を図る。逃走する船内で起こる不可解な出来事をきっかけに、黒蜥蜴は船内に明智が侵入していることを知る。長椅子に隠れていた明智に気づいた黒蜥蜴は、部下に命じて長椅子を縄で簀巻きにし、海に抛りこませる。明智が海に抛りこまれたことを、黒蜥蜴に知らされた早苗は嘆き悲しむ。黒蜥蜴もまた、悲しむ早苗を叱咤しながらも、声を上げて泣き、悲しみに暮れる。無二の好敵手を失ったさびしさか、それとも別の思いが黒蜥蜴の胸に湧き上がったのか定かではないが、黒蜥蜴はいとも不思議な悲しみにうちひしがれる。

黒蜥蜴は東京に上陸し隠れ家に逃亡する。その隠れ家では不審な出来事が続いていた。黒蜥蜴が部下に隠れ家の中を調べさせたとき、部下の一人が火夫の松公がいなくなつたと報告する。更に、黒蜥蜴の目の前に潤一青年が二人現れる。黒蜥蜴は不審な出来事を起こしているのが松公であると判断し、松公が潤ちゃんに変装しているのだろうと考える。しかし、実際に、潤ちゃんに変装していたのは明智小五郎であり、本物の松公は、海に抛りなげられた長椅子の中にいたのであつた。更に、黒蜥蜴によつて誘拐されたと思われた早苗は、替え玉で身代わりの桜山葉子であつた。すでに黒蜥蜴の隠れ家は、明智の手配により警察の包囲するところとなつていた。追いつめられた黒蜥蜴は、縄目の恥に堪えかね、密室に閉じこもり毒を飲む。死に際、明智と対面した黒蜥蜴は、お別れに「たった一つお願い」をする。明智は願いを聞き入れ、黒蜥蜴の額に唇を贈る。

「かくして黒蜥蜴は、名探偵明智小五郎の膝を枕に、さも嬉しげな微笑を浮かべながら、この世を去つたのであつた。」

第三節 三島由紀夫による補助線

第二節で述べたように、黒蜥蜴の目的は「岩瀬氏の所有する日本一のダイヤモンド『エジプトの星』と令嬢の早苗を盗み出すこと。そして、岩瀬氏に雇われた名探偵・明智小五郎を倒すこと」である。ところが、小説の終末には、黒蜥蜴の不可解な行動が描写されている。

黒衣婦人は、地底王国の女王のほりからも、縄目の恥に堪えかねたのである。いずれ逃れぬ運命とはいえ、せめて最期をいさぎよく、密室にとじこもつて、われとわが命を絶とうとしたのにちがいない。それと気づいた明智小五郎は、騒がしい捕物の場をあとにして、単身彼女の私室に駆けつけた。／「おい、あけたまえ。僕は明智だ。一こと言いたいことがある。ぜひここをあけてくれたまえ」／忙しく叫ぶと、中から力ない声が答えた。／「明智さん、あなたお一人だけ

ならば……」(傍線引用者、以下同様)

黒蜥蜴は、鍵を回し、ドアを開ける。「縄目の恥に堪えかね、密室に閉じこもり毒を飲」んだのであるから、負けを素直に認めることは、つまり「恥をさらす」ということになるのではないか。しかし、「地底王国の女王のほこり」のもとに、「最期をいさぎよく」飾るのではなく、彼女は明智を部屋に入れ、自らの死に際をさらすのである。

「あたし、あなたに負けましたわ。なにもかも」／戦いに敗れただけではない。もつと別な意味でも負けたのだということを、言外に含ませて言う、彼女はすすり泣き始めた。もううわずつた両眼から、涙がとめどもなくあふれ落ちた。／「あたし、あなたの腕に抱かれていますのね……嬉しいわ……あたし、こんな仕合せな死に方ができようとは、想像もしていませんでしたわ」／明智はその意味をさとらないではなかった。一種不可思議な感情を味わわないではなかった。

黒蜥蜴の本来の目的は「明智小五郎を倒すこと」であるから、戦いに敗れ負けを認めることは、目的を達成できなかったということである。目的を達成できなかったということは、その相手に対し本来「悔しい」や「憎らしい」という感情を抱くだろう。しかし傍線部の引用からそのような感情を読み取ることができない。黒蜥蜴は早苗誘拐に失敗し、「エジプトの星」も手に入れることができなかったため、明智との戦いに敗れたことを素直に認めるのであるが、戦いに敗れただけではなく、「もつと別な意味でも負けたのだということ、言外に含ませて言う」。更に、明智に死に際をさらすことを「こんな仕合せな死に方ができようとは」と語る。つまり、明智の腕に抱かれて死ぬことに喜びを感じているのである。本来の目的を達成できず、明智の腕に抱かれて今にも息絶えようとしている状況で喜びを感じるということを、どのように解釈すれば違和感を感じなくなるのか。

自分が何もかも負けたということ、黒蜥蜴は認めている。「なにもかも」とは、探偵対犯罪者としての無二の好敵手という枠を越えた、男と女としての感情にも負けたということではないだろうか。黒蜥蜴は明智のことを一人の男として愛していたことに気づいたのである。だからこそ「負けましたわ。なにもかも」なのであり、愛した男の手に抱かれて死ぬからこそ、「こんな仕合せな死に方ができようとは」ということなのだろう。明智自身も、この黒蜥蜴の告白によって、黒蜥蜴という存在に、好敵手というだけでなく一人の女性の姿を見ることが、「一種不可思議な感情」を抱いたのではないだろうか。

黒蜥蜴が明智に対して恋愛感情を抱くのはどの場面からであろうか。恋愛感情を感じるためには、黒蜥蜴と明智が直接(あるいは間接的に)接触を持つことが必要となるであろう。小説の中で黒蜥蜴と明智が接触する部分を追っていくことにより、「恋愛」という要素を見出すことが可能となるのではないか。黒蜥蜴が明智に対して恋愛にも似た感情を感じているであろうと判断できる部分を、終末の場面から小説を逆に追って考察する。

大阪から東京に逃走する船に明智が乗っていることを知った黒蜥蜴は長椅子の中に隠れていた明智と会話をする。

実にへんてこな会話であった。一人は椅子の中の間横たわっているのだ。一人はそのからだの上に、クッションをへだてて腰かけているのだ。お互いに体温を感じ合わぬばかりである。しかもこの二人はうらみかさなる仇敵。すきもあらば敵の喉笛に飛びかからんとする二匹の猛虎。そのくせ、言葉だけは異様にやさしく、まるで夫と妻の寝物語のようであった。

お互いに体温を感じ合わぬばかりの距離で、まるで夫と妻の寝物語のように会話を重ねているところから、黒蜥蜴が何か不思議な感情を明智に対して抱き始めたと考えることも出来るだろう。

黒蜥蜴は部下に命じ、明智を長椅子に閉じ込め、縄で簀巻きにして海へ放り込む。そして、とらわれている早苗に対し、明智を海に放り込んだと話す。早苗は唇をかみしめてじつところえていたが、とうとう我慢がきれなくなり、シクシクと泣きはじめた。

「およしなきい。泣くなんてみつともないわ。意気地なし、意気地なし」／黒蜥蜴はそれを見て、妙に甲高い声で叱ったが、彼女もいつの間にか早苗さんのそばにくずれ折れていた。そしてこの妖婦の頬にも、止めどない涙が流れていた。／無二の好敵手を失ったさびしさか、それとも何かもつと別の理由があったのか、女賊はいとも不思議な悲しみに、うちひしがれていた。

逃走する船内の場面である。明智を簀巻きにして海へ放り投げると部下に命令して実行させたのは、黒蜥蜴自身である。しかし、明智が放り込まれ死んだであろう事を実感した黒蜥蜴は、「いとも不思議な悲しみに、うちひしがれ」ることとなる。不思議な悲しみが、愛していた男を自分の手で殺してしまった悲しみ、また、殺してしまってから明智に対する恋心に気づいたということであれば、恋愛的要素を感じることは出来るのではないかと考える。

更に小説を遡り考察をする。宝石商の岩瀬氏から日本一のダイヤモンド『エジプトの星』を受け取った後、通天閣から逃走を図る場面を引用する。通天閣にある売店の女房になりすました女賊は、その亭主と一緒にエレベーターに乗って地上に降りる。この亭主こそ変装した明智小五郎なのであるが、そのことを黒蜥蜴は知らない設定となっている。

「ありがたい。もう大丈夫ですわ……まあおかしいわね。あたしたち、まるで駆落者みたいじゃありませんか」／いかにも彼らは奇妙な駆落者の姿であった。男は耳が悪いのか、頭から顎にかけてグルグルと繃帯を巻き、その上からきたらしい鳥打帽をかぶり、木綿縞の着物の上に黒らしゃの上つ張りを着て、皮のバンドを締め、素足に板裏草履といういでたち。女は前にしるした通りの女房姿。兩人とも、不意気なマスクをかけている。その男が女の手を引いて、人眼を忍ぶように、木立ちから木立ちをぬって、チョコチョコと小走りに道を急いでいたのだ。

売店の亭主が、変装していた明智であるということを、黒蜥蜴が気づいていたかどうかは、この部分だけでは判断できないが、少なくとも二人手を取り合って逃走しているということを考えると、三島のいう「恋愛」的要素が感じられなくも無い。

しかし、ここで挙げたどの場面においても、「恋愛」という要素は見いだせても、黒蜥蜴が明智を恋愛対象として意識している（あるいは意識し始めた）という決定打には成りえない。なぜなら、黒蜥蜴の恋愛感情が「好き」や「愛している」といった直接的な言葉で語られないからである。伏線は張ってあったと考えられるかもしれないが、話の流れとして、唐突感が否めないであろう。

では、どのようにして、終末の部分について解釈をすればよいのか。解釈するにあたり、補助的な説明の役割を果たすのが、三島由紀夫による『戯曲 黒蜥蜴』である。

三島由紀夫が『黒蜥蜴』を戯曲としてリライトしたことは先述の通りであるが、私は、三島が書き換えた戯曲とはつまり、三島の『黒蜥蜴』に対する説明ではないかと考察する。三島は乱歩作の『黒蜥蜴』及び自身の『戯曲 黒蜥蜴』について評論を執筆している。以下に『黒蜥蜴』についての評論を引用する。

「黒蜥蜴」は江戸川亂歩氏の唯一の女賊物であり、又、探偵に對する女賊の戀を扱った點でも、

。初出は『婦人画報』（婦人画報社）一九六一年十二月号に掲載される。その後、二〇〇七年九月に学研M文庫より『黒蜥蜴』が再刊された。ここでは、二〇〇九年に再刊されたものを参考文献として使用した。

唯一のものだらうと思ふ。私は少年時代に読んで、かなり強烈な印象を興へられたが、石原慎太郎氏なども戦後の少年期に読んで同じやうな印象を抱いたと言つてゐたから、原著の普及は十分でなくとも、テレビによる名探偵明智小五郎の名の普及と共に、十分現代の讀者にアツピールするものを含んだ作品と思はれる。／私は數年前この原作をバレーエ臺本にしたてようとしてつひにチャンスを逸したが、昨年吉田史子さんのプロデューサー・システムの芝居に委嘱を受けて、これを劇化する好機を得た。⁴

傍線部から、原著の普及は十分でないが、明智小五郎というポピュラーな存在を中心に映像化することで、讀者に作品の面白さを「アツピールする」ことができるかと三島が考えていることが読み取れる。また、「これを劇化する好機」と三島が述べていることから、この小説の持つ面白さが、文字からのイメージを映像として具体化し讀者の視覚に訴えることで、よりリアルに伝わるのであると三島は捉えていたのではないかと私は解釈する。そして十分でなかった原著の普及が、三島由紀夫のおかげで埋もれずに済んだだけでなく、三島の引いた補助のおかげで原著のストーリーが理解されやすくなったのである。また、ストーリーが理解されやすくなったことにより、ドラマ化や映画化と更に映像化されることになったのである。

さらに、三島は、次のようにも評論している。

私の劇化の重點は、原作ではごくほのかに扱はれている女賊黒蜥蜴と明智小五郎との戀愛を前景に押し出して、劇の主軸にしたことで、これに従つて、雨宮と早苗のエピソードも、(この筋だけはかなり原作と變へつつ) ずつと前景へでてくることになった。そして推理的興味はむしろ後景へ押しやり、キオの大魔術のやうなケレンの面白味で主題を彩ることにして、そのためにセリフもロマンチックな、大時代な感じのものにした。現代の話でありながら、一九二〇年代のジャズ時代のやうな味を出すことを狙つたのである。そのためには歌舞伎の割せりふのやうな技巧も大膽にとり入れ、かういふ思い切つた様式化によつて物語の不自然さを救ひ、且つ原作の耽美主義を強調するやうに力めた。⁵

つまり三島は、江戸川乱歩作『黒蜥蜴』に存在する恋愛要素を読み取り、それを前面に押し出した戯曲にリライトすることで、原著の終末部分についての補助線を引いたのである。そして、三島の補助線により、終末部分に感じられる違和感が解消されるのではないか。三島は評論の中で「戀愛」という言葉を用いてはいるが、「ごくほのかに」ということから、あくまで原著は推理的面白さを追求した内容であると考えていたのだから。しかし、原著に存在する「戀愛」というもう一つのストーリーを三島は巧みに読み取り、主軸に据えて戯曲化した。そして、この三島の戯曲を踏まえたいやうでもう一度原著を読み直すことにより、原著における終末部分を違和感なく受け入れることができ、原著の持つ個性という様なものを、讀者も受け入れやすくなるのではないだろうか。

三島は原著に存在する推理的面白さを好意的に評価しながらも、「ごくほのかに」扱われていた「戀愛」の面白さを「かなり強烈な印象」として捉え、その原著の中にある「耽美主義」を高評価したため、「戀愛」を主軸とした戯曲を作りあげた。また、舞台化という直接視覚に訴える活動で表現にすることにより、讀者が小説に対して抱いていたイメージの具体化を果たしたのだと考える。無から有を生んだわけではなく、もともとあった「恋愛」という薄い要素を、三島は濃く表現しただけなのである。原作を戯曲にリライト(リメイク)するといふ行為は、そのリライトする人の原作に対する思い入れが入るだろう。その思い入れにより、原作のどこかが拡大解釈され、どこかが過小評価されるのは当然のことではないだろうか。三島由紀夫作『黒蜥蜴』では、黒蜥蜴が雨宮潤一に対して、次のよ

⁴ 三島由紀夫『三島由紀夫全集第三十卷』「黒蜥蜴」について 昭和五十年十月 新潮社
⁵ 4と同じ

うに語る。

今から私の言うことに、お前がどう思おうと自由だといっているの。私が明智小五郎に恋している、と言ったらどう思ってる？／＼（中略）私だって女ですよ。だれが好きになろうと勝手だわ。（省略）

明智に対する恋愛感情を黒蜥蜴自身に語らせることこそが、三島の原著に対する思い入れの具現化ではないだろうか。さらに、長椅子に隠れていた明智を、海に放り投げて殺すつもりで簀巻きにしなげらも、黒蜥蜴は明智に対して愛の告白をする。

私、今まであなたみたいな人に会ったことがなかった。はじめて恋をしたんだわ、この黒蜥蜴が。あなたの前へ出ると体がふるえ、何もかもだめになるようなきがしたわ。そんな私を、そんな黒蜥蜴を、私はゆるしておけないの。だから殺すの。つまらない誘拐事件の怨みつらみで殺すのじやないわ。わかって？あなたがこれ以上生きていたら、私が私でなくなるのが怖い。そのためあなたを殺すの。……好きだから殺すの。好きだから……

黒蜥蜴に何度も告白をさせることにより、三島自身が原著に感じた「かなり強烈な印象」である「ごくほのかに」扱われていた「恋愛」の面白さを読者や舞台を観る観客に「アッピール」したのである。原著では語り手によって「ごくほのかに」語られていた黒蜥蜴の感情が、三島によって多弁に語られることにより、「女賊黒蜥蜴と明智小五郎との恋愛」が「前景に押し出」されるのである。更に、明智を海へ放り込んだ後に黒蜥蜴が流した涙の理由も、三島によってはっきりと語られる。

私の涙がお前に見える？（中略）／＼私が誰よりも好きだった男、もうこの世にいない男のためだわ。誰だかわかって？

「私の涙」とはすなわち、原著において明智を海に放り投げた後妖婦の頬に流れた「止めどない涙」であり、「私が誰よりも好きだった男、もうこの世にいない男」とは明智小五郎のことである。黒蜥蜴は「好きだから」明智を殺し、「誰よりも好きだった男」のために涙を流すのである。明智への恋愛感情を黒蜥蜴に何度も語らせ告白させることにより、原著からは感じ得なかった黒蜥蜴の感情の高ぶりを、三島は巧みに表現したのである。

更に三島は、次のような評論も記している。

『黒蜥蜴』は子供の頃讀んだ江戸川さんのものでは一番ロマンチックなものだと思ひ、一度これを芝居にしてみたいと思つてゐた。日本の推理小説の搖籃期に現はれたものとして素朴な味があり、人を食つた所が面白い。トリックなども今では簡單に思はれるが、隣近所のリアリズムがもてはやされてゐるので、絶対に隣近所に發生しないリアリズムを出したいと思つてゐる。劇化は原作を自由に脚色し、ナゾときの興味を主眼とせず、女賊と探偵の戀愛劇といふ方向に重點をおいてみた。

三島は原著に「耽美」を読み取っている。「耽美」とは即ち、「ごくほのかに」しか描かれていない「恋愛」なのではないだろうか。「ロマンチックで」「絶対に隣近所に發生しない」である恋愛劇を創り上げ、恋愛にひたることこそが、三島が原著に感じた「かなり強烈な印象」なのだと考える。推理小説

⑥ 三島由紀夫『三島由紀夫全集第三十五卷』関係者の言葉（「黒蜥蜴」について）

としてよりも恋愛小説としての原著に、三島は耽美と言う価値を見出したのであろう。そして、三島は自身の戯曲で原著の耽美を評価し、表現したのであろうと解釈する。更に、三島は原著の推理小説としての「素朴な味」と「人を食った」トリックを面白いと評価している。日本で推理小説が発展を遂げようとしていた時期の作品として、この原著は非常に素朴でありながらも当たり前にある光景ではなく、しかし隙をついて人を食ったようなトリックを仕掛けている、推理小説としても価値の作品だと三島は捉えていたのではないだろうか。

三島は耽美的であり、且つ素朴な原著を手にして抱いた強烈な印象を、戯曲を創るという形で自らの解釈を世に示したのである。江戸川乱歩作『黒蜥蜴』は三島にそのような創作意欲を喚起させるほどのエネルギーを秘めた、素晴らしい小説であると私は考える。

第二章 「明智小五郎」をめぐって

第一節 明智の変遷

明智小五郎は、『D坂の殺人事件』（「新青年」博文館 一九二五年一月増刊号）で初めて登場した。以後の乱歩作品においてもしばしば活躍する存在である。また、日本の創作探偵小説に登場した最初のシリーズ探偵であり、『D坂の殺人事件』において高等遊民として登場して以来、数々の難事件を解決しており、現在でも名探偵としてその名を轟かせているキャラクターである。特に少年物といわれる作品においては、欠くことのできない存在である。

『黒蜥蜴』（初出・『日の出』において）では、主要人物紹介の中で「岩瀬氏附きの名私立探偵」「岩瀬氏父娘を護る私立探偵」「多くの隠れた部下と協力して岩瀬家を護る私立探偵。この稀代の女賊一味と戦ってゐる。」「岩瀬家を護る名私立探偵。黒蜥蜴の秘密船を突止めて乗込んだが、女賊に発見され、計られて遠州灘に簀巻きにされて抛り込まれてしまった。」「岩瀬家を護る名私立探偵。黒蜥蜴の秘密船に乗込んだが、女賊に発見されて、隠れてゐた椅子もろとも遠州灘の沖に投込まれてしまった。」と紹介されている。

明智は登場してから『黒蜥蜴』までの九年間で服装や髪形、生活スタイル等で大きく変化している。ここでは、以下に明智小五郎登場作品年譜を挙げ、明智の変遷について考察する。

昭和九年の『黒蜥蜴』以降、新聞小説や大人向けの雑誌では、明智小五郎の姿を見ることはない。乱歩は、昭和十一年に講談社「少年倶楽部」に『怪人二十面相』を連載開始する。この執筆以降、少年物と言われる子供向けの作品に明智小五郎を登場させ世に送り出すこととなる。明智小五郎は少年たちの憧れの存在となるのである。この変化は、明智の活躍の場が大人向けの雑誌から子供向けのものに移行したことを意味するのではないだろうか。ここでは、大人向けに執筆された最後の作品となるであろう『黒蜥蜴』までの作品において、明智が登場する作品だけを取り上げ、①乱歩の休筆時期、②小説中の明智の描写、③長編か短編か ④語り手、を観点として三期（初期、移行期、安定期）に分け、更に考察を進める。

明智小五郎登場作品年譜（番号は論文著者によるもの）

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号
黒蜥蜴	人間豹	吸血鬼	黄金仮面	魔術師	猟奇の果て	何者	蜘蛛男	一寸法師	屋根裏の散歩者	幽霊	黒手組	心理試験	D坂の殺人事件	作品名
昭9	昭9	昭5	昭5	昭5	昭5	昭4	昭4	大15	大14	大14	大14	大14	大14	初出年
日の出1月号 10回	講談倶楽部新年号 15回	報知新聞夕刊	キング9月号 12回	講談倶楽部7月号 11回	文芸倶楽部新年号7号から『白蝙蝠』 12回	時事新報夕刊 28回	講談倶楽部8月号 11回	東京朝日新聞 67回	新青年夏季増刊号	新青年5月号	新青年3月号	新青年2月号	新青年新春増刊号	初出
40	40	36	36	36	36	35	35	32	31	31	31	31	31	年齢 乱歩
期定安		期行移							期初					

第一項 初期

明智小五郎が登場する小説の特徴として、人称変化があげられる。『D坂の殺人事件』と『黒手組』は一人称で小説が書かれており、『心理試験』と『幽霊』は三人称が用いられている。これら四作品は、明智が登場する小説の中では短編の部類に入る。そこで、この一人称で執筆された短編二作品と三人称で執筆された短編二作品を初期とし、明智の変遷についての考察をする。

『D坂の殺人事件』では、語り手は「私」である。この小説は「(上) 事実」と「(下) 推理」との二部構成となっており、「私」の目を通した人物描写や情景描写がされている。語り手の「私」は、まず自らのことを説明しはじめる。

当時私は、学校を出たばかりで、まだこれという職業もなく、下宿屋にゴロゴロして本でも読んでいるか、それに飽ると、当てどもなく散歩に出て、あまり費用のかからぬカフェ廻りをやる位が、毎日の日課だった。

「私」が日ごろ通っていたカフェ「白梅軒」がD坂にあり、明智小五郎はこの白梅軒で「私」と「知

合になった一人の妙な男」として登場する。そして、「私」の目を通して次のように紹介される。
(中略) 名前は明智小五郎というのだが、話をして見ると如何にも変り者で、それで頭がよさ相で、私の惚れ込んだことには、探偵小説好きなのだが、その男の幼馴染の女が今ではこの古本屋の女房になつていてということ、この前、彼から聞いていたからだ。

明智は白梅軒の向かいにある古本屋の細君の幼馴染という存在である。棒線部から解釈すると、語り手の「私」は古本屋の細君に気があり、なんとか関係を持ちたいと考えているのだろう。そこで、細君の幼馴染である明智を利用して、何とかしようと考えていたのではないだろうか。まだ事件は発生していないが、この段階では、主役はあくまでも語り手の「私」なのである。

そして、事件が発生する。明智の幼馴染である古本屋の細君が絞殺される。「私」と明智は事件の第一発見者となる。だが、事件は「当時の名探偵という噂の高かった小林刑事」の手にゆだねられる。明智は探偵することもなく、「(上) 事実」は終わる。

明智が自らの推理を披露し始めるのは、「(下) 推理」においてである。語り手「私」は、ここでもう一度明智の紹介をする。

併し彼とは昨今のつき合いだから、彼がどういう経歴の男で、何によつて衣食し、何を目的にこの人世を送っているのか、という様なことは一切分らぬけれど、彼が、これという職業を持たぬ一種の遊民であることは確かだ。強いて云えば書生であろうか、だが、書生にしては余程風変わりな書生だ。いつか彼が「僕は人間を研究しているんですよ」といったことがあるが、其時私には、それが何を意味するのかよく分らなかつた。

明智は高等遊民として紹介されているが、どんな経歴で何を目的に生きているのかは、一切明らかにされていない。はつきりしているのは、殺された古本屋の女房と幼馴染という過去と、人間を研究しているという現在だけである。殺人事件から十日程たったある日、私と明智は、明智の下宿で事件に関して何を為し、何を考えそして何を結論したかを話し合う。一通り私の推理を聞いた明智は、突然ゲラゲラと笑い出した。そして私の推理を否定した明智は、次のように語る。

彼は頭をモジャモジャやりながら答えた。「僕のやり方は、君とは少し違つたのです。物質的な証拠なんてものは、解釈の仕方でも何でもなるものですよ。一番いい探偵法は、心理的に人の心の奥底を見抜くことです。だが、これは探偵者自身の能力の問題ですがね。兎も角、僕は今度はそういう方面に重きを置いてやってみましたよ。(省略)」

明智は青年時代「彼は頭をモジャモジャやりながら」推理をする癖があった。この「頭をモジャモジャ」する癖は、移行期を挟んで、安定期まで続く習癖となる。明智は心理学上の連想診断法が犯罪捜査の方面にも利用され始めたこと、昔の名判官とか名探偵といわれる人は、心理学の発達しない以

前から彼らの天稟によって、この心理方法を実行していたこと、心理学者の種々の機械的方法は、唯こうした天稟の洞察力を持たぬ凡人の為に作られたものにすぎないことを「私」に語る。そして明智は一種の連想診断を、殺された古本屋の夫とその二軒隣の蕎麦屋の主人に行ったことも話す。そしてその結果、犯人を見つけたのだということを「私」に告げる。そこへ、明智の下宿する煙草屋のお上さんが夕刊を持ってきた。夕刊を見た明智は、やがて、そつと溜息をついて云う。

「アア、とうとう耐え切れなくなったと見えて、自首しましたよ。妙な偶然ですね。丁度その事を話していた時に、こんな報導に接するとは」／私は彼の指す所を見た。そこには、小さい見出しで、十行許り、蕎麦屋の主人の自首した旨が記されてあった。

明智の推理が正しかったことは、この夕刊を持って証明された。明智は連想診断法を用いて犯人を突き止めたのである。「僕は人間を研究しているんですよ」という明智にとつては、この推理にいたるまでの過程が、研究対象としてどんなに楽しく興味深いものを感じられただろう。そして、煙草屋のお上さんが持つてきた夕刊によって自分の推理が正しかったことが証明された瞬間、どんなに達成感と優越感を感じたことだろう。D坂で起こった殺人事件は、下宿の四畳半の中で熟成された、明智の探偵としての天稟を、世に知らしめるのである。

明智が登場する第二作品目である『心理試験』は、「D坂」とは異なり三人称で書かれている。小説全体が六つに分かれている。一、二で事件が起き、三では事件を担当した笠森判事が心理試験を行って事件を推理しようとしたこと、四では、その心理試験に対して犯人がどのような準備をし、腹案を練ったかが説明されている。実際に明智が推理を始め、犯人に対して心理試験を行うのは五、六の二部である。明智の登場場面を引用する。

それは心理試験が行われた翌日のことである。笠森判事が、自宅の書斎で、試験の結果を書きとめた書類を前にして、小首を傾けている所へ、明智小五郎の名刺が通じられた。／「D坂の殺人事件」を読んだ人は、この明智小五郎がどんな男だかということ、幾分御存じであろう。彼はその後、屢々困難な犯罪事件に関係して、その珍しい才能を現し、専門家達は勿論一般の世間からも、もう立派に認められていた。笠森氏ともある事件から心易くなったのだ。

棒線部から、肩書きは不明であるが名刺を持つていること、「D坂」以降犯罪事件に関係していることがわかる。また、珍しい才能であろう天稟の洞察力を持って犯罪事件を解決し、世間からもその推理力が認められていたと解釈できる。つまり、明智は私立探偵として世に認められていたといえるのではないだろうか。

女中の案内につれて、判事の書斎に明智のニコニコした顔が現れた。このお話は「D坂の殺人事件」から数年後のことで、彼ももう昔の書生ではなくなつた。

書生ではないのだから、何かの職業に就いているか、あるいは高等遊民と考えられよう。しかし名刺もあるということを考えて、職業としての探偵を行っていたのではないかと考えるのが妥当ではないだろうか。

明智は、事件以来、度々笠森判事に逢つて詳しい事情を聞いていたのだ。

明智が事件にかかわって推理していくのは、誰かに「解決してほしい」と依頼されたわけではない。少なくとも右の引用から解釈すると、明智は常に事件に対して自ら歩みよって検事とコンタクトをとる、事件に足を踏み入れていくのである。『心理試験』では、弁護士になりすました明智が、犯人に心

理試験を行い、最終的には追い詰めていくという結末となっている。明智は、自らの知識と天稟の洞察力によって事件を解決したのだ。

明智が自ら事件に近づいていくのは、前述の「僕は人間を研究しているんですよ」に象徴されるように、人間の心理が絡んだ面白そうな出来事を本能で探し出し出しているからではないだろうか。「D坂」もそうであるように、偶然事件に巻き込まれたように見せかけて、本当は面白そうな事件を選んでいくののように感じられる。とすれば、「明智がいるから事件が起こる」という考え方もできるのではないだろうか。

『黒手組』では、語り手の「私」によって、事件について語られていく。

私も犯罪とか探偵とかいうことには人並以上の興味があり、「D坂の殺人事件」でも御承知の様に、時には自ら素人探偵を気取る程の稚気も持合せているのですから、出来ることなら一つ本職の探偵の向うを張ってやろうと、様々に頭を絞って見ましたものの、これは逆も駄目です。(中略)そこで、当然私は友達の明智小五郎のことを想出しました。

語り手である「私」の身の回りで起こった事件を、警察の力を持っても解決できなかったため、明智に事件解決を依頼するという構成となっている。これまでの二作が、明智自ら事件に近づいていくのに対し、依頼されるという形に変化している。自ら積極的に事件に関わるのではなく、依頼されて事件に関わっていくというのは、この後の明智の行動スタイルの原型となるのではないだろうか。

『黒手組』では、事件解決までの経緯が明智によって語られる。しかも「私」にのみ真相を語り、他の登場人物には一切の真相は語られない。明智が「私」に語る内容がすべてであり、果たして明智の語りが真相かどうかを裏付ける証拠が不十分であるということが考えられるだろう。明智の推理は確かに論理的ではあるが、「私」が「こうして明智の真相を聞けば聞く程、却って真相が分からなくなってくるのです。」と語ることから考えると、論理的な推理というよりは、明智独特の語りで相手を煙に巻くと考えることもできるのではないだろうか。

『黒手組』はこれまでの二作品と比較すると、犯人を追及する点では共通であるが、明智の事件への関わり方や、解決までの経緯、明智という人物設定が徐々に変化していると考えられる作品であろう。この変化が、事項で考察する移行期の作品の原型を形作る基礎となるのではないだろうか。

大正十四年五月に発表された『幽霊』では、明智が不自然な形で小説に登場する。登場人物である実業家である平田氏の周囲で、不可解な事件が起こるところから小説は始まるのだが、再び、語り手が三人称へと変化している。

平田氏が事件のストレスを解消するため、静養にやってきたところで明智が登場する。

「実は僕はあなたがここへ入らした最初から、ある興味を以ってあなたの御様子に注意していたのですよ……何かあるのでしょうか。お話下さる訳には行きませんかしら」

見ず知らずの人間に対して接触を図るにしては、実に不自然で突拍子もない語りである。自ら事件に近づいていくというスタイルではあるが、その設定が非常に不自然である。本来であれば、依頼者に依頼されて事件に関わっていくというのが素人探偵であると考ええる。しかし、依頼されなければ事件に関わることはできない。だからこそ、不自然な形を取ってでも事件に関わりを持つとうとした結果、不自然さが生まれたのではないだろうか。明智が事件に関わる必然性が感じられないのである。

不自然さを解消するため、明智は結末部分で次のように語る。

「実は僕はこんな事を探し歩いている男なんですよ。この世の中の隅々から、何か秘密な出来事、奇怪な事件を見つけ出しては、それを解いて行くのが僕の道楽なんです」

明智にとって、事件を見つけて解決することは道楽なのである。つまり、「人間を研究」し、「人の

心理の奥底を見抜く」行為は、正義感から起こるもの、また、生活の糧となる職業としての探偵ではなく、「道楽」であるということなのである。事件に関わり解決すること、明智は楽しんで行っているということが、初期の作品に共通していえるのではないだろうかと考察する。

第二項 移行期

前項で考察した初期作品が短編であることと比較して、大正十四年の雑誌「新青年」夏季増刊号から、乱歩は長編を書き始める。更に大正十五年には新聞小説を連載するようになる。そして、一回目の休筆の後、立て続けに雑誌や新聞で長編連載を書いている。ここでは明智小五郎が登場する長編小説の一作目である『屋根裏の散歩者』から昭和七年三月に休筆するまでの『吸血鬼』を移行期と捉え、考察していく。

『屋根裏の散歩者』と『一寸法師』は一回目の休筆以前に書かれた小説である。

『屋根裏の散歩者』では、初期の流れを組んだ明智の登場となっている。三人称の語り手が語るころの主人公であり、殺人事件の犯人でもある郷田三郎と明智の邂逅の場面である。

明智は、座につくと早速、その三郎の避けたがっている事柄を話題にするのでした。恐らく彼は、誰かから自殺者の話を聞いて、幸、同じ下宿に三郎がいるので、持前の探偵的興味から、訪ねて来たに相違ありません。

依頼されたのではなく、偶然にも同じ下宿であったという設定である。しかも、初期後半の『幽霊』と同じように、興味本位で自ら事件に関わっていくというスタイルである。明智にとっては、事件を解決し犯人を捕まえるのではなく、興味深い事件を見つけ、それを解決して自己満足という感覚なのではないだろうかと考察する。その根拠となる部分を以下に引用する。

「僕は決して君のことを警察へ訴えなどしないよ、ただね僕の判断があたっているかどうか、それが確かめたかったのだ。君も知っている通り、僕の興味はただ『真実を知る』という点にあるので、それ以外のことは、実はどうでもいいのだ。(省略)」

事件に対する自分の判断が当たっていれば、後のことはどうでもよいというのは、自己満足以外のなにものでもないと考え。明智が事件に関わることにより、事件が解決することは確かであるが、裏を返せば、事件として警察が捉えないものを明智がその興味によって関わり、事件として立件し、解決していくという非常におせっかいな行為によって事件が解決していくということではないだろうか。ここまでは、初期の流れを組んでいるが、この作品から『一寸法師』までの間には、数年のブランクがあり、そのブランクについて語られながら、『一寸法師』は始まる。語り手は三人称である。明智の知合いの小林紋三に山野夫人が事件解決の依頼をする場面である。

「ねえ小林さん。いつかあなたのお知合に、有名な素人探偵の方がある様に伺いましたわね。私の思い違いでしょうか」／「ハア、明智小五郎じゃありませんか。あの男なら、友達と言う程ではありませんけれど、知っているには知っています。長い間上海に行っていて、半年ばかり前に帰ったのですが、その当時逢った切り久しく訪ねもしません。帰ってからは余り事件を引受けなということですよ(省略)」

上海から帰った明智は、その設定が変化している。四畳半の下宿から、菊水旅館に二部屋を借りて暮らしている。ホテル住まいのようなものである。更に、上海から持ってきた自慢の支那服を着るよ

うになっている。和装から洋装への変化である。

そして、いつの間にか、長く伸ばした髪の毛に指を突っ込んでかき廻す癖を始めていた。

髪をかき廻す癖だけは、初期から移行期へかけて変化しない要素である。明智の容姿は変化しているが、習癖と探偵スタイルについては、初期後半との変化が感じられない。初期後半の『黒手組』の明智の語り口と、『二寸法師』での真相を語る明智とが、ほとんど同じなのである。どちらも真実を語ってはいるのだから、その語り口が聞いている相手を惑わすような「騙り」なのである。事件は解決するのだが、解決した後の読後感がスッキリしない構成となっている。

その後、一回目の休筆を経て、明智の探偵スタイルとその状況が大きく変わっていく。

『蜘蛛男』『猟奇の果て』からは探偵小説というより、明智の冒険活劇という要素が強くなる。洋行帰りの明智が警視庁の浪越警部をパートナーに、変装術やさまざまな心理トリックを駆使して、事件を解決していくのである。更に『魔術師』で生涯の伴侶となる文代夫人と出会い、『黄金仮面』では日本にやってきたアルセーヌ・ルパンと対峙する。『吸血鬼』では晴れて文代夫人と結婚し、少年助手小林も含め、ホテル住まいからお茶の水の開花アパートへ引っ越し、住居兼事務所として構えるのである。

明智の近況が大幅に変化する中、明智の事件への関わり方も変化する。事件そのものの怪奇的要素が強くなり、その要素は、『人間豹』、二十面相シリーズへとつながっていくのである。

移行期の中で唯一冒険的要素がないのが『何者』である。この小説は、明智が登場人物の一人に変装するトリックが用いられている。最後に明智が正体を明かし、事件が解決するという設定であるが、この小説は安定期の『黒蜥蜴』につながっていくと考えられる。

移行期の作品は総じて冒険活劇的要素が強く、大衆を楽しませる明智の活躍が描かれている。そしてこのことが、安定期の明智のキャラクターに強く影響していると考察する。

第三項 安定期

ここでは、二度目の休筆後に書かれた小説である『人間豹』と『黒蜥蜴』の二作品を安定期と捉え、この後に続く二十面相シリーズとの関連を考えつつ、同時期に発表されたこの二作品を比較しながら考察していく。

どちらの小説も、移行期までのものとは構成が違う。それは、移行期までの小説が「フーダニット（誰が犯人か）」であるのに対し、『黒蜥蜴』では女賊・黒蜥蜴が、『人間豹』では人間豹・恩田が早々に犯人として小説の中に登場するのである。つまり、通例の探偵小説のスタイルとは相容れない作品構成なのである。このことから、移行期とは分離して考察するべきではないかと考える。

さて、『黒蜥蜴』は雑誌「日の出」に昭和九年一月号より十二月号まで連載されていたものである。『人間豹』は雑誌「講談倶楽部」に昭和九年五月号より翌十年五月号まで連載されていたものである。明智小五郎の登場の仕方を比較してみる。『黒蜥蜴』は事件が発生する前に、依頼されている。

そのかわりには、用意周到にも、万々一のことがあったとはと、かつて店の盗難事件を依頼してその手並みのほどを知っている、私立探偵の明智小五郎に、令嬢の保護をたのむことにした。探偵はあまり乗り気でもなかったけれど、岩瀬氏のたつての頼みをいなみかねて、彼らの滞在中、隣室に泊まりこんで、この奇妙な盗難予防の任務に付くことになった。

明智の容姿について詳しい描写はされていないが、移行期とほぼ同じように、「細長いからだを黒の背広につつんで」依頼者の前に現われている。しかし、『人間豹』では、第一の殺人事件、第二の誘拐

事件が起こってからの登場となる。以下に明智の登場場面を引用する。

それについて神谷は数日以前から考えていたことがある。警察力が頼むに足らぬとすれば、もう外に手段はない。一縷の望みは有力な民間探偵の力を借りる事であった。私立探偵と云えば、忽ち思い浮かぶのは明智小五郎だ。彼なれば、警察が手古摺った難事件を易々と解決したという話を幾つも聞いている。殊に人間豹の様な怪犯人には、明智こそ似つかわしいのではあるまいか。

更に、『黒蜥蜴』では語られることのなかった明智の近況が次のように語られる。

明智小五郎は「吸血鬼」の事件の後、開花アパートの独身住まいを引払って、麻布区龍長土町に、もと彼の女助手であった文代さんという美しい人と、新婚の家庭を構えていた。その家庭が同時に探偵事務所でもあった。夫婦ともに、探偵好き冒険好きなので、家庭と事務所とを別々にする必要は全くなかったのだ。

この事務所兼住居には少年助手小林も同居している。これらの引用から、安定期において移行期の作品の流れを組んでいるのが『人間豹』であり、これまでの長編連載作品と二線を引いているのが『黒蜥蜴』であると考えられる。そして、『人間豹』という作品は初期からの流れも受け継いでいると考えられる部分を引用する。事件解決の依頼に訪れた神谷青年が、明智邸内の応接室で人間豹恩田との異様な邂逅以来の凡ての出来事を説明する場面である。

明智は例の、青年時代からの癖で、モジャモジャに延ばした髪の毛の中へ、右手の五本の指を櫛のように突込みながら、時々相槌を打って、非常に熱心に聞き入っていた。

『D坂の殺人事件』での習癖が、同じように描写されている。また、黒蜥蜴では明智のプライベートが一切描写されないのに対し、『人間豹』では、探偵事務所の住所、新婚であること、夫婦ともに探偵好き冒険好きであることなどが細かく描写されている。このことを踏まえても、『人間豹』が初期移行期の流れを組んだものであるといえるだろう。

明智は既に私立探偵としての地位を確立し、殊に難事件や怪事件に関しては、警察よりも頼りになる存在であると認知されている。これら傍線部の部分からも、明智の名探偵としての確固たる地位が確立されると同時に、「名探偵明智小五郎」というキャラクターも確立され、そしてそのキャラクターが揺ぎ無いものになったと考える。つまり「名探偵明智小五郎」というキャラクターが安定して小説の中で使われ始めたということではないだろうか。

『黒蜥蜴』では、最初黒蜥蜴を捉えることに失敗した明智が、替え玉を用いて黒蜥蜴を欺くことによつて事件を解決している。また、『人間豹』では、少年助手小林と明智夫人文代さんの活躍があつて、事件が解決の方向へ向かっている。明智の探偵法が初期の心理を追求することから、足を使った推理の移行期を経て、この後の二十面相シリーズに続くような流れになっていると考えられる。また、終末において、『黒蜥蜴』では女賊・黒蜥蜴が自害し、事件は大団円で終わるのに対し、『人間豹』では、犯人である人間豹・恩田がアドバルーンに捕まって空に逃げ、結局捕まらずに終わるのである。

「アハハ……、君達俺をつかまえた気ではいるのかい。ハハハ……、こいつはお笑い草だ。なぜといてね、俺は決してつかまらないからな」

人間豹・恩田は捨て台詞を吐いて空に浮かび上がる。この終末の方法こそ、二十面相シリーズの原点となったのではないかと考察する。推理を楽しむという初期と比較して、明智のキャラクターが確立された安定期の二作品は、探偵小説ではなく冒険活劇小説であり、後の乱歩の作品に大きな影響を

与えたのではないだろうか。

第二節 『黒蜥蜴』のトリック

明智小五郎が登場する作品について、松村喜雄は、「事件によって明智はカメレオンのように、その性格を変え」、「初期短編の明智、通俗長編の明智、戦後の明智、『怪人二十面相』シリーズの明智は、それぞれ別人のような印象をうける」と述べている。⁸ここでは、明智の登場する初期短編と通俗長編を比較しつつ、『黒蜥蜴』におけるトリックを検証する。

初登場作品、『D坂の殺人事件』で、明智小五郎は語る。

僕のやり方は、君とは少し違うのです。物質的な証拠なんてものは、解釈の仕方でもなんでもなるものですよ。一番いい探偵法は、心理的に人の心の奥底を見抜くことです。だが、これは探偵者自身の能力の問題ですがね。兎も角、僕は今度はそういう方面に重きを置いてやってみましたよ。

犯罪者がどのような心理で犯罪を犯したかを探偵者が見抜くことでトリックが解明される、と明智は考えていると解釈できる。つまり、何らかの方法で犯罪者の心理により深く入り込むことで、トリックが明かされ、事件が解決へ導かれていく、というのが明智の探偵法なのである。更に、この探偵法は初期短編の集大成といえるであろう『屋根裏の散歩者』でも用いられている。明智は犯人・郷田三郎に対して次のように語る。

僕は決して君のことを警察へ訴えなどしないよ。ただね、僕の判断が当たっているかどうか、それが確かめたかったのだ。君も知っている通り、僕の興味はただ『真実を知る』という点にあるので、それ以上のことは、実はどうでもいいのだ。

明智は、『真実を知る』ために、自らも屋根裏に上り徘徊する。明智自身、犯人と同じ行動をとることで、犯人の心理を探り、犯罪のトリックを見抜き、真実を解明するという探偵法をとっていると考えられる。

しかし、その後の明智登場作品『一寸法師』になると、探偵法が変化しているのが読み取れる。『一寸法師』は通俗長編第一作目と考えられる作品である。この作品から以降は、初期短編にみられるような「心理的に人の心の奥底を見抜く」という、一書生による地味な探偵法ではなく、素人探偵という肩書きのもと、警察と連携しながら犯人を追い詰める方法へとシフトしていく。更に、敵だけでなく味方をも欺く変装や、読者が思いもつかない機智を働かせ、事件を解決に導く探偵法は、もはや素人探偵の域を超えた、派手なパフォーマンスとしての明智の存在を目立たせる術となっているのである。『黒蜥蜴』においても、明智は派手なパフォーマンスとしての一面を垣間見せる。また、『黒蜥蜴』という小説は、あらかじめ犯人が知れている（明智は黒蜥蜴の正体を知らないが、読者は「暗黒街の女王」の章で、黒蜥蜴を知ることとなる）ので、初期短編のような探偵法を用いることだけでなく、探偵することの意義そのものが失われがちになっているのではないだろうか。つまり、「誰がそれをやったのだ」と突き詰めるのではないということである。正体の知れない黒蜥蜴をどのように追い込んでいくのが、明智の腕の見せどころとなり、読者の期待するところの小説の核となっているのだろう。

小説『黒蜥蜴』は、「暗黒街の女王」として君臨する黒蜥蜴が、緑川夫人になりすまして岩瀬氏に近づき、岩瀬氏が所有する日本一のダイヤモンド「エジプトの星」を手に入れる為に、庄兵衛の娘である早苗を誘拐し、利用しようというところから物語が始まる。

⁸ 松村喜雄『乱歩おじさん 江戸川乱歩論』 晶文社 一九九二年九月

岩瀬氏はほとんど毎日のように配達される、執念ぶかい犯罪予告の手紙になやまされていたのだ。／「お嬢さんの身辺を警戒なさい。お嬢さんを誘拐しようたくらんでいる、恐ろしい悪魔がいます」そういった意味が、一度々々ちがった文句、ちがった筆蹟で、さも恐ろしく書きしるしてあった。手紙の数が増すにしたがつて、誘拐の日が一日々々とせまってくるように感じられた。

岩瀬氏は、商用のほかにも、縁談がまとまりかけている名家と引き合わせる為に早苗さんを同伴した。しかし、犯罪予告の手紙のことがあるため、「用意周到にも、万々一のことがある」と私立探偵の明智小五郎に、令嬢の保護を頼み込む。緑川夫人として岩瀬氏と懇意になっていた黒蜥蜴も、明智が令嬢保護を依頼され、岩瀬親子と同伴していることを知る。黒蜥蜴にとって明智は「ちよつと手ごわ」く、「あいつと一騎打ちの勝負をするのかと思うと、あたし愉快だわ。」と感じる相手である。そして黒蜥蜴は「あたしは、例の明智小五郎と四つに組んでいなけりやいけないのよ。(中略) あいつから眼をはなしたら、どんなことになるかわかりやしない。」と語る。このことから、黒蜥蜴は明智に対して相当な警戒心を抱いていたことがわかる。明智の、私立探偵としての評判は黒蜥蜴の耳にも入っていたであろう。黒蜥蜴自身も策士であるから、今回の誘拐を成功させるためには、明智のウラをかくようなトリックを仕組まなければならぬと気づいたであろう。黒蜥蜴は、次のような計画を雨宮潤一に語る。

「ええ……すると、つまり、あの宝石屋さんの娘さんを、このトランク詰めにして誘拐しようつてわけですかい。」／(中略)「あの娘さんを、今のようトランクにつめこむ仕事はあたしの受け持ちで、それにはちゃんと手立てもあるし、麻酔剤の用意もできているの。そのトランクをここから運び出すのが、あなたの役目、第一回の腕試しよ。(以下省略)」

黒蜥蜴は、岩瀬氏と自分が滞在するホテルのロビーで明智と談笑する。そして、いつのまにか二人は賭けをすることとなる。緑川夫人は賊が早苗を誘拐する方へ宝石を賭け、明智は早苗が誘拐されない方へ探偵という職業を賭ける。そこに岩瀬氏と早苗がやってきて、さしさわりのない世間話をはじめ、女同士の一組は立ちあがり、歩きはじめ。緑川夫人である黒蜥蜴は、早苗のことを言葉巧みに自分の部屋へ誘いこむ。早苗は躊躇したが、黒蜥蜴により部屋の中へ連れ込まれる。連れ込まれたのは潤一青年の部屋であり、誘拐の計画が実行される。

だれもいないのを見定めたらうえ、やがて、全身を部屋のそとへ現したのを見ると、それは意外にも緑川夫人ではなく、早苗さんであった。(中略) いや、そうではない。いかにも早苗さんと同じ髪形、同じ目がね、同じ着物、同じ羽織ではあったけれど、よく見れば、どこかしら違ったところがあった。(中略) それは早苗さんとそっくりのいでたちをした緑川夫人にすぎなかった。

早苗はトランクに入れられ、黒蜥蜴が早苗になりすまして岩瀬氏の部屋へ向かう。岩瀬氏の部屋に入った黒蜥蜴は、岩瀬氏が常用している睡眠薬をより強力なものにすり替え、自分は早苗になりすまし、そのままベッドに入る。岩瀬氏が部屋に戻ったときにベッドで眠っていたのは、早苗ではなく黒蜥蜴であったのだ。明智を欺くために黒蜥蜴が考えたトリックは、黒蜥蜴自身が早苗になりすますものであった。この時すでに早苗は誘拐され、潤一青年によってホテルの外へ連れ去られていたのだ。そのことを知らない岩瀬氏は、黒蜥蜴によってすり替えられた睡眠薬を飲み、「たちまちグッスリと」寝入ってしまう。岩瀬氏が寝入ったことを確認した黒蜥蜴は、明智を欺くためのトリックを更に仕掛ける。

岩瀬氏の隣の自室で読書をしていた明智は、隣室のドアとおぼしきあたりに聞こえる、あわただしいノックの音に驚かされる。廊下に出た明智は、ボーイとともに激しくドアをたたき、岩瀬氏を起こす。ボーイが岩瀬氏に電報を渡す。

「コンヤジュウニジヲチュウイセヨ」／文面は簡単だけれど、その意味は明瞭であった。「今夜十二時

に早苗さんの誘拐が行われるぞ」という例のおどし文句なのだ。／「お嬢さん、別状ありませんか」明智はちよつと真剣な調子になってたずねた。／「大丈夫、大丈夫、早苗はちゃんとわしの隣に寝ています」／岩瀬氏はヨロヨロと寢室のドアに近づいて、そこから隅のベッドを見ながら、安心したように言った。／明智もその後ろから、ソツとのぞいて見たが、早苗さんは向こうをむいて、スヤスヤと眠っていた。

この時、早苗はすでに誘拐されているはずである。しかし、岩瀬氏の隣には早苗が眠っている。明智もそれを確認している。岩瀬氏と明智は黒蜥蜴によって欺かれているのである。しかも、「コンヤジュウニジヲチュウイセヨ」という電報から、明智は今夜十二時に誘拐が行われると判断するだろう。電報の送り主は黒蜥蜴に違いない。明智は、この時点で二度黒蜥蜴によって欺かれていることとなる。

その後明智は岩瀬氏の部屋で待機することとなる。そこへ、騒ぎを聞きつけた緑川夫人がやってくる。明智と緑川夫人が談笑しているうちにも、時間は刻一刻と過ぎる。そして、予告された「ジュウニジ」になるが、何事も起こらない。当然である。早苗はとうに誘拐されているのだから。しかし、ベッドには早苗の姿がある。ここから、緑川夫人である黒蜥蜴と、明智の一騎打ちが始まる。

「あなたはまだ、早苗さんが果たしてかどわかされなかったかどうか、確かめてもごらんなさらないじゃありませんか」／夫人は勝ちほこったようにいうのだ。「しかし、しかし、早苗さんは、ちゃんと……」／さすがの名探偵もしどろもどろであった。気の毒にも、彼の広い額には、じつとりと脂汗が浮かんでいた。(中略)「お嬢さんを見てください。そこにやすんでらっしゃるのは、確かにお嬢さんにちがいませんね」／明智らしくもない愚問である。／「なにをおっしゃるのだ。娘ですよ。あれが娘でなくして一体だれが……」(中略)「早苗！早苗！」岩瀬氏のせきこんだ声が、令嬢の名を呼び続けた。返事がない。(中略)「明智さん、やられた。やられました」／岩瀬老人の口から、なんともいえぬ怒号がほとばしった。／「だれです。そこに寝ているのは、お嬢さんではないのですか」

明智を欺くため、黒蜥蜴によって仕掛けたもう一つのトリックが明かされる。

明智と緑川夫人とが駆け寄ってみると、なるほど、それは人形ではなかった。早苗さんだとばかり思いこんでいたのは、一個無生の人形の首にすぎなかった。よくショウ・ウインドウなどに見かけるあの首ばかりの人形にめがねをかけ、早苗さんとそっくりの洋髪のカツラをかぶせたものにすぎなかった。胴体のかわりには、敷蒲団をそれらしい形に丸めて、毛布がかぶせてあったのだ。／ああ、人形の首。なんとというズバぬけた欺瞞だろう。あまりにも人を喰った子供だましのトリックではないか。だが、子供だましのトリックであったからこそ、おとなたちがまんまと一ぱい喰わされたのだ。さすがの明智小五郎も、犯人にこれほど思い切った稚氣があるうとは、想像もできなかったのだ。

早苗誘拐のために仕組まれたトリックは三つ。第一に、緑川夫人が早苗になりましたこと。第二に「コンヤジュウニジ」という電報で、早苗誘拐が「今夜十二時」に行われると明智に思わせること。第三に、早苗になりすました緑川夫人と人形の首を入れ替え、早苗がベッドに寝ていると思わせることである。早苗はすでに誘拐されているのだから、明智の目の前で直接誘拐するような仕掛けや、変装や、誘拐後の逃走手段として部下を大勢準備するというような、手の込んだ大掛かりなことをする必要はない。しかし、明智の目を欺き、早苗がすでに誘拐されていると岩瀬氏にもさとられてはいけないのである。そこで黒蜥蜴は、あえて「子供だまし」のトリックを用いたと解釈できるのではないか。「思い切った稚氣」ではなく、黒蜥蜴という策士によって、考えに考え抜かれた、いわば機智に富んだトリックなのである。明智も黒蜥蜴に対して警戒心を抱き、ホテルの四方に五人もの部下を配置しておいたのだが、岩瀬氏の部屋から、「ジュウニジ」に誘拐されることを前提としていたため、黒蜥蜴のトリックを見抜くことができず、まんまと引っかけってしまったのであろう。明智の心情は、語り手によって次のように語られる。

明智小五郎は、長い素人探偵生活中に、これほどみじめな立場に置かれたことはなかった。岩瀬氏の信頼に対しても、緑川夫人の広言に対しても、引つ込みのつかない窮地であった。しかもその失策の原因が、子供だましの人形の首とあつては、恥じても恥じきれない恥辱ではないか。

すでに誘拐されていた早苗の替え玉として使われていたのは、「子供だましの人形の首」であつた。結局、本物の早苗は明智の部下によって保護されるものの、明智は同室にいた黒蜥蜴を取り逃がしてしまふ。早苗が「ジュウニジ」以前に誘拐されていたこと、そしてまさに「子供だまし」のトリックに自分が易々と引つ掛かつていたことを認識した明智は、どれほどの悔さを感じていたのであろうか。明智の悔しさは、語り手によって更に語られる。

相手もあるうに、かよわい女のためにこの敗北を見たかと思うと、悔んでも悔み足りない気持であつた。／＼殊に、見張りの部下の口から、相手が素早い変装でのがれ去つたことを知ると、思わず「ばかっ」と、その部下をどなりつけたほど腹が立つた。

更に明智は、自分自身が得意とする変装によつて、黒蜥蜴がホテルからの逃亡に成功したことを知る。「悔んでも悔み足りない気持」になり、部下を「ばかっ」よばわりする。明智はよほど腹が立ち、怒り心頭であつたに違いない。まして、相手が「かよわい女」であれば、さらに明智のプライドはズタズタに切り裂かれてしまつたのではないだろうか。素人とはいへ、探偵として警察からも一目置かれ、頼りにされるまでに築き上げてきた信頼が、脆くも崩れ去つたに違いない。

稀代の強敵を向こうに廻して、彼の闘争心は燃え上がったのだ。

明智は黒蜥蜴を自分の「強敵」として認める。黒蜥蜴による「恥辱」こそが、明智の、素人探偵としてのプライドに火を点けることとなる。明智は考えたであらう。早苗を確実に保護する方法を。そして、「悔んでも悔み足りない気持」を鎮める方法を。明智は、彼の持てるだけの知恵を絞りながら、なんとか黒蜥蜴に復讐し、早苗を確実に守り抜く方法を模索する。

そして、明智が次のように考えたのではないかと私は解釈する。自分が黒蜥蜴のことを警戒したように、黒蜥蜴も自分のことを警戒しているのであるから、やはり、黒蜥蜴のウラをかけた方法で、早苗を誘拐されないようにしなければならない。そこで、黒蜥蜴が明智を欺くために使つたトリックを、明智は再利用して黒蜥蜴を欺こうとしたのではないだろうか。早苗を黒蜥蜴の魔の手から守るには、替え玉というトリックが使えるのではないかということ、更にこのトリックを利用して「悔やんでも悔やみ足りない気持」をはらし、黒蜥蜴に復讐することができないのではないかと、明智が考えたと私は解釈する。つまり、人形の首をヒントに、早苗の替え玉を捜し、黒蜥蜴に仕掛けるトリックとして使おうという発想である。明智は、背恰好や顔つきが似た人間であり、大阪弁を話す女性が早苗の替え玉として利用できるか気づいたのではないだろうか。特に大掛かりな仕掛けをする必要もなく、且つ、黒蜥蜴をまんまと引つ掛け、早苗誘拐を阻止することのできるトリックを、黒蜥蜴に教授されたと解釈してよいだろう。明智は恥辱を受けると同時に、黒蜥蜴に仕掛けるトリックのヒントを与えられたのであろうと私は解釈する。

明智は、大阪の街で桜山葉子という女性を雇う。この葉子こそ早苗の替え玉であり、「怪老人」の章以後、早苗として誘拐され、最後まで黒蜥蜴のみならず、うかつな読者にも気づかれることなく、早苗を演じた切った女性である。

桜山葉子が二人になつたのだ。一人は潜り戸の中へ、一人はその袖をくぐつて自動車へ。髪からかたから着衣まで、これほどよく似た人間があつてよいものか。いやいや、そればかりではない。彼女

を真底から怖がらせたのは、そのもう一人の女性の顔までが、葉子とそっくりに見えたことだ。

葉子が早苗の替え玉となるために二人が入れ替わった場面であるが、小説中には、「葉子と早苗が入れ替わった」という表現がない。引用の棒線部分から読者が推測して判断することとなる。この替え玉となるための二人の入れ替えが、明智によって黒蜥蜴に仕掛けられたトリックとなるのである。「怪老人」の章以降、棒線部のような出来事があったことについては、一切触れられていない。黒蜥蜴が早苗を誘拐し、明智を欺いたトリックは、黒蜥蜴と語り手によって読者に対して克明に語られているのであるが、葉子と早苗が入れ替わったことは、明智や語り手からは全く語られない。ここに『黒蜥蜴』の小説としてのトリックがあると考えられる。そのトリックに気づかない読者は、早苗が早苗本人のまま誘拐されたと思いついで小説を読み進めていくこととなるだろう。

誘拐された葉子は、この後船に乗せられて、黒蜥蜴のアジトに連れて行かれるのだが、常に早苗らしく振る舞い、黒蜥蜴に正体を見破られないようにする。本来早苗は、語り手によると「大阪風におっとりとした」性格である。対して、葉子は「少々不良性をおびたモダン・ガール」というように明智によって語られる。葉子にとって、容姿は似せることが出来ても、性格をも似せ、早苗として振る舞うことは、その期間が長ければ長いほど苦しかったに違いない。ところが葉子は、明智が黒蜥蜴を追い詰める為に船に同乗していることを知ると葉子らしさを発揮する。

黒蜥蜴が逃走に利用している船の中では、早苗のいる部屋で奇妙な出来事が起こっていたため、黒蜥蜴が早苗を連れてくるよう部下に命じていた。そして、黒蜥蜴と早苗の替え玉である葉子は、向かい合って話をする。

「でも、あたし……」／早苗さんが何かしら強情な様子をして、上眼使いにチラと黒衣婦人を見た。「でも、どうだとおっしゃるの？」／「あたし、そんな所へ行くの、いやですわ」／「そりや、あたしだって、あんたが好き好んで行くなんで思っっちゃしない。いやでしょうけど、あたしはつれて行くのよ」／「いいえ、あたし、行きません、決して……」／「まあ、大へん自信がありそうね。あんたはこの船から逃げ出せるとも思っているの？」／「あたし信じていますわ。きつと救ってくださいますわ。あたしちつとも怖くはありませんわ」／この確信に満ちた声を聞くと、黒衣婦人は何かしらギョツとしないではいられなかった。／「信じているって、だれをなの？だれがあんたを救ってくれるの？」／「おわかりになりませんか？」／早苗さんの口調には、解きがたい謎と、不思議に強い確信がふくまれていた。かよわいお嬢さんを、これほど強くさせたものは、一体全体何者の力であったか。

語り手によって、かよわいお嬢さんと語られてはいるが、葉子らしさが如実に表れているのではないだろうか。後に明智は葉子のことを、「不良娘ならばこそ、この大芝居をまんまと仕こなすことができた、あれほどの目にあってもがんばり通す肝っ玉があったのさ。」と称賛している。また、葉子自身が「あれほどの目にあってもがんばり通す肝っ玉があった」のは、明智への確固たる信頼があったからであろう。そして、これだけ葉子らしさがある場面にも関わらず、黒蜥蜴は早苗が替え玉だとは気づかない。棒線部から、黒蜥蜴の意識は明智に向けられ、明智が船に乗り込んでいるなら、一刻も早く見つけなければならぬという焦燥感に駆られていると解釈できるだろう。葉子は、葉子らしさを発揮することで、結果的に黒蜥蜴の意識をはっきりと明智のほうに向けることとなるのである。黒蜥蜴は、早苗よりも明智に意識が向いたため、ますます葉子が早苗の替え玉であることに気づかず、物語は展開していく。

黒蜥蜴のアジトに着き、明智が黒蜥蜴を徐々に追い詰める為に、更なるトリックを仕掛ける。黒蜥蜴のコレクションである生人形を始末し、本物の警官を生人形に扮装させ並べせたり、明智自身が雨宮潤一に変装して黒蜥蜴の前に姿を現すのである。すぐに黒蜥蜴を追い詰めないところに、明智のパフォーマンスとしての見せどころがあるのだろう。黒蜥蜴による二度目の早苗誘拐事件に関するトリックが、明智の口から黒蜥蜴に明かされる。

「ホホホホ、いくらなんでも、早苗さんが二人になるなんて、そんなばかばかしい……」／＼二人になったんじゃない。ここへ誘拐されてきた早苗さんはせものなんだよ。(省略)」

黒蜥蜴は最後の最後まで、早苗さんが偽物だと気づいていないということが分かる表現である。「ばかばかしい……」ということからも、黒蜥蜴は、自分が明智に騙されていたことに気づかないでいる様子が読み取れるだろう。

名探偵の、意外に次ぐ意外をもってする物語を聞くにしたがって、黒衣婦人はもう、心底からこの大敵の前に兜をぬいだ。明智小五郎という一個不可思議の大人物を、心から崇拜したいほどの気持になっていた。だが、彼女の部下の無知な荒くれ男どもは、決して心から彼を崇拜しなかった。それどころか、首領にまんまと一ぱい喰わした不届きものとして、かつは彼らの同僚松公を海底のもくずとした仇敵として、かぎりなき憎悪と憤激を感じた。

明智の仕掛けたトリックを明かされた黒蜥蜴は、「崇拜したいほどの気持」を持って明智と向かい合う。黒蜥蜴は、自分が仕掛けた人形の首のトリックを、明智が利用するとは思ってもよらなかったのではないかと。言ってみれば「子供だまし」のトリックを実行した明智に、黒蜥蜴自身も一ぱい喰わされたのである。黒蜥蜴があれほど警戒しても、明智はその警戒をくぐり抜け、追いつめてくる。しかも、明智の持つ機智を最大限に発揮しながら。だからこそ、黒蜥蜴にとって明智は「まんまと一ぱい喰わした不届きもの」ではなく「心底からこの大敵の前に兜をぬぐことのできる存在なのである。そして、黒蜥蜴が、明智が感じたような「悔やんでも悔やみ足りない気持」を抱かずに、「心から崇拜したいほどの気持」になったのは、お互いに策士として知恵を絞って対峙してきたからなのではないだろうか。黒蜥蜴は「負け」を認めたのである。更に、ここでは語り手によって、読者に向けてトリックが明かされる。

読者諸君は、この物語のはじめの方の「怪老人」という一章を記憶されるであろう。名探偵明智小五郎のぎまん作業は、実にあの時に行われたのであった。怪老人はつまり明智の変装姿にほかならなかった。そして、あの夜から、ほんとうの早苗さんは、明智だけが知っている、別の場所にかくまわれ、それと入れ違いに、早苗さんになりました桜山葉子が岩瀬家に入りこんだのであった。

「怪老人」の章で「実際に葉子と早苗が入れ替わった」という表現を用いず、入れ替わる状況描写だけをするにより、語り手が読者にもトリックを仕掛けていたと考えられる。「怪老人」の章には「しかし、敏感な読者は、この一女性の奇異な経験が、事件に関してどんな深い意味を持っているかを容易にさとられるに違いない」という一節がある。「深い意味」とは、葉子と早苗が入れ替わるトリックのことだろうと解釈できるが、果たして、どのぐらいの読者が「深い意味」に気づくことが出来たのであろうか。読者にはそのトリックよりも、もっと気になることがあったはずである。それは、明智がどのように黒蜥蜴を追いかけていくのか、黒蜥蜴はどのようにして明智の追求を逃れていくのかという点ではないだろうか。この入れ替えというトリックは、単なる子供だましのようなものであるが、実は小説全体のトリックにもなっており、このトリックに引っかけると、葉子と早苗の入れ替えに全く気付かずに、小説を最後まで読み進めてしまうのである。このトリックは、単純に見えて奥の深いものではないかと考える。読者にもう一度この小説を読ませるには十分なトリックであろう。

江戸川乱歩自身は、探偵小説のトリックについて次のように述べている。

探偵小説のトリックというものは、外国人が殆ど書き尽くしている。新しいつもりで考え出しても、結局誰かの使い古しである場合が多い。そこで、私はそれをさける為に一つ手段を思いついた。なるべく人の知っているような有名なトリックを、裏返して用いる手だ。それ故、トリックはありふれてい

ればいる程好都合である。読者はハハア、又例のトリックかと分かったつもりで安心して読んでいる。そいつをヒョイトとひっくり返す。すると、有名なトリックである丈に、効果が大きいのだ。つまり、当時私が苦心して考えたのは、トリックをひっくり返す所の、もう一つのトリックについてであった。⁶

つまり、トリックとは見方を変えれば何度でも利用できるものと乱歩は考えていたのである。見方を変えるということは、トリックを用いる小説中の人物が変わることとも言えるのではないだろうか。黒蜥蜴が明智に対して用いた人形による替え玉トリックを、明智が葉子と早苗の入れ替えトリックとして黒蜥蜴に用いることで、小説の中のトリックは完成する。更に、読者も語り手によるトリックに引かかると、小説全体としてのトリックも完成するのではないだろうか。『黒蜥蜴』は単なる通俗長編小説にすぎないかもしれない。しかし、読み込めば読み込むほど、この通俗長編小説に用いられたトリックは、単純且つ複雑なものであり、完成度の高いものだとは私は考える。

第三章 「女」をめぐる

第一節 黒蜥蜴

『黒蜥蜴』には、明智を囲む二人の女が存在する。一人は小説のタイトルとなっている「黒蜥蜴」であり、もう一人は、替え玉として明智に見出された「桜山葉子」である。ここでは黒蜥蜴とその部下の雨宮潤一との関係について考察する。

第一項 黒蜥蜴という女

黒蜥蜴自身について、初出とテキストで明らかにされているのは、①年齢不詳（まだ三十になるかならないの美貌の妖婦） ②本名、生まれ、両親や兄弟の有無など一切不明 ③職業は女泥棒 ということだけである。黒蜥蜴を知るためには何も情報が無いようなものである。ここではテキストから黒蜥蜴の人物像について迫っていく。

黒蜥蜴登場場面で、語り手は次のように語り始め、この物語は始まっていく。

この国でも一夜に数千羽の七面鳥が締められるという、或るクリスマス・イヴの出来事だ。

なぜ「締められる」なのだろうか。「食される」のではないだろうか。街のネオン・ライトが明るく、非常ににぎやかなクリスマス・イヴを表現する言葉として、「数千羽の七面鳥が締められる」というのは、これから起こるであろう出来事が、「表通り」で繰り広げられるのではなく、「裏通り」で、しかも、「陰のある出来事である」という暗示のように取れる。そもそも「締められる」というのは、「締め殺される」ということであり、クリスマス・イヴのにぎやかさや華やかさを読者に伝える表現としては適切ではないだろう。しかし、この後に続く「暗黒街」についての説明に対しては、ふさわしいのではないだろうか。「裏通り」や「暗黒街」といったイメージを読者に持たせる表現であろう。

「やあ、ダーク・エンジェルだ。ダーク・エンジェルだ。」

黒蜥蜴の登場である。黒蜥蜴は天使ではない。黒天使である。前述の「締められる」と同様のイメ

―ジを読者に与える効果があるように考えられる。このあと、語り手によって黒蜥蜴が「女王の資格は充分すぎるほど」であり、「大胆不敵なエキジビジョニスト」であると語られていく。黒蜥蜴の魅力や雰囲気が、語り手によって読者に伝えられていくのである。

「殺したんです。」／潤ちゃんは、足もとを見つづけながら、低い不気味な声で言った。／「まあ、だれをさ。」／黒天使は、この驚くべき答に、さして心を動かした様子もなかった。／「まあ、とうとうやつてしまったの……どこで？」

この会話から、潤一青年の犯した人殺しが、黒蜥蜴にとつて驚くべき出来事ではなく、いつか起ることであろう当然の結果として捉えられているということが推測される。さらに、黒蜥蜴は、別の死体を用いて、潤一青年を「まったく安全に」してしまう。容姿端麗、大胆不敵、女王の資格が充分という他に、知恵があり、行動力もあり、人殺しも死体をも恐れない、怖いものなしの黒蜥蜴のイメージが、読者に伝わるであろう。さらに、雨宮潤一青年の視点からも黒蜥蜴の様子が語られ、読者に伝えられていく。

(中略) この女はまあ、まるで貴婦人のような綺麗な顔をしていて、なんて大胆な恐ろしいことを思いついたものだろう。

「筋骨たくましい、一くせありげな男」に「恐ろしい女」と言わしめる黒蜥蜴は、どのような女性なのであるか。更に、潤一青年の視点を借りた語り手によって、次のように語られる。

潤一青年は、死骸なぞよりも、彼の救い主の黒衣婦人が恐ろしくなった。一体この女は何者だろう。(中略) この女はよほどの大悪党にちがいない。

潤一青年は、色恋沙汰の末に二人も殺していながら、警察には捕まりたくないため、黒蜥蜴に着せた恩を利用して逃げようとした悪党である。ところが、黒蜥蜴は、その潤一青年を超える大悪党として、語り手によって語られる。黒蜥蜴は、ここでもやはり、その美貌やずばぬけた振舞い、底知れぬ贅沢だけでなく、知恵があり、大胆な行動ができる、怖いもの知らずあるいは好奇心旺盛な女性として、イメージされるであろう。

この場面について、語り手による最初の一文と、潤一青年にかかわる黒蜥蜴のエピソードによって、黒蜥蜴という女性のイメージが、ある程度読者の中で形成されていくのではないだろうか。そして、語り手は、読者の中で形成されたイメージを上手く利用しながら、物語を進めていく。

ホテルの場面において、黒蜥蜴はその知恵を働かせ、早苗の誘拐を実行する。トランクに早苗を詰め込み、山川健作に運ばせるというトリックである。そして黒蜥蜴は、誘拐が成功したにもかかわらず、ホテルを出ない。黒蜥蜴自身がその理由を語っている。

「あたしは、例の明智小五郎と四つに組んでなけりゃいけないのよ。あんたが先方に着くまでに、あいつから眼をはなしたら、どんなことになるかわかりやしない。あたしは邪魔者の探偵さんの引きとめ役なのさ。この方がトランクをはこぶより、ずっとむずかしいかもしれないわ。」

確かに、黒蜥蜴が早苗に扮し、寝室で岩瀬氏と会話をしたり、人形の首をダミーとして置くことで、早苗誘拐の事実を明智に悟られないようにしておく必要はあるだろう。黒蜥蜴が予想した通り、岩瀬氏も明智も、早苗がすでに誘拐され、首だけの人形と入れ替わっていたことに気が付かない。黒蜥蜴が巧妙に仕組んだ作戦に、岩瀬氏も明智もまんまとはまってしまったのである。それにしても、誘拐

が成功した後の黒蜥蜴の行動には、不可解なことが多い。

「早苗さんはよくおやすみですか？」／緑川夫人はドアをしめて、明智の前に腰かけ、そつと寝室の方を見やりながら、低声でたずねた。

誘拐が成功し、さらに明智の眼をくらませているのだから、変装して逃げればいい（緑川夫人の姿のままでも問題は無いかもしれない）はずなのに、わざわざ明智の目の前にあらわれ、執拗に明智を挑発する。自分は誘拐犯だと怪しまれない自信があるからこそその挑発だろうか。その自信はどこから来るのか。黒蜥蜴の自信過剰な一面が見える行動ではないだろうか。しかし、明智は、黒蜥蜴（緑川夫人）の挑発には乗らず、また、岩瀬氏への脅迫状や早苗さんの誘拐されることに対してのあせりも見せない（ふりをしている）。岩瀬氏と明智が誘拐に気づき、物語が展開されていく中で、女賊は「完全に勝利を得」「こみあげてくる歓喜をどうすることもできなかった。」のである。そして、語り手が女賊の様子を語る。

女賊は今や名探偵への敵意をあらわにして、大胆不敵な態度を示した。

黒蜥蜴の性質が表現された語りである。裸踊りをみせる大胆不敵なエキジビジヨニストの一面がここでもうかがえる。さらに、明智に対する「敵意」がむき出しになる。

黒蜥蜴は、なぜこうも挑発を繰り返し、そして明智に対して敵意をあらわにするのか。その根拠となりうるであろうことが、黒蜥蜴によって、潤一青年に語られている。

「(中略) あいつはあたしを少しも知らないからいいようなものの、明智って、虫のすかないやつだわ。」

「この世の美しいものという美しいものを、すっかりと集めてみたい」がために、誘拐も人殺しもいとわない大悪党（あるいは女泥棒）の黒蜥蜴は、以前から存在を軽んじられているような感覚を、明智に対して抱いていたのではないだろうか。死体を利用し、殺人を犯した潤ちゃんを「まったく安全」にしてしまうことから、悪事を要領よくこなし、上手く隠蔽するのが黒蜥蜴のやり方だと考えれば、警察にも明智にも気づかれないだろう。しかし、それでも、「少しも知らないからいい」と語ってはいるけれども、実際は「こんなに執念深い犯行予告を繰り返しているあたしを、明智はなぜもつと気にかけないのかしら。」というような不満が心のどこかにあり、その不満が敵意に変化し、そのことが、黒蜥蜴をさらに大胆な行動（明智を挑発すること）に走らせているのだろう。

「(中略) ああ、なんだか胸がドキドキするようだわ。明智小五郎なら相手にとって不足はない。あいつと一騎打ちの勝負をするのかと思うと、あたし愉快だわ。ね、潤ちゃん、すばらしいとは思わない？」

実のところ、黒蜥蜴は明智と一騎打ちがしたかったということが分かるセリフである。要領よく悪事をこなし、上手く隠蔽してきた黒蜥蜴にとって、名探偵として世間での誉れ高い明智小五郎と勝負することは、誘拐に勝るとも劣らない、値打ちのあることだったのだろう。そして、欲しいものは何でも手に入れてしまう女賊にとっては、唯一手に入れられない、価値のあるものこそが、明智との一騎打ちだったのである。今、まさに値打ちある勝負を手にし、完全に勝ちを得たはずの黒蜥蜴であったが、その大胆不敵さと自信過剰さが、黒蜥蜴自身を窮地に追い詰めることとなる。明智の部下が無事早苗さんを助け出し、ホテルに連れ戻ったのである。

味方はかよわい女一人、敵は早苗さんを除いても、警官まで加わった四人の男、逃げようとして逃げられるものではない。

しかし、この窮地をも、黒蜥蜴は智恵の鋭さによって乗り越えてしまう。

ああ、不敵の女賊は、最後のどたん場に立って、何がおかしいのか、異様に笑い出したのだ。

黒蜥蜴はスリの腕もあり、明智の拳銃を奪う。と同時に、明智が鍵穴に差し込んだままのドアの鍵を奪う。拳銃を敵に向けながら素早くドアに駆け寄り、自分が逃げる段取りを組んでしまう。「異様な笑い」は自分が逃げられる計算が、黒蜥蜴の中で完了したからであろう。または、拳銃を奪われ、鍵を差したまま抜かなかつた明智の行動を嘲笑したのかもしれない。この場面において、自分が捕まるかもしれないという心理的に相当追い詰められた窮地においても、その状況を逆手にとつて、上手く利用することができるというところに、黒蜥蜴の頭脳的な行動力の高さがうかがえるであろう。

部屋を出て、かっきり三分で変装しホテルを出て行く。早苗を誘拐できなかったという点では、明智との勝負に負けたかもしれない。しかし、黒蜥蜴にとつて、明智に捕まらずに逃げることであったことが、一騎打ちの勝負に勝ったことになるのではないだろうか。

「ホホホホホ、あてちやつたわね。あたしは女泥棒。それから人殺しもしたかもしれないわ。」

黒蜥蜴はいったい何者なのかという疑問について考えてみる。黒蜥蜴は自分自身のことを「女泥棒」としか表現していない。黒蜥蜴は実は何者でもなく、ただ孤独を埋める手段として、本能のままに美しいもの（美しい人）を自分のコレクションとする、一人の孤独な女だったのではないだろうか。アジトにはたくさんの部下がおり、手元には美しい宝石や美術品がある。また、暗黒街では女王様と呼ばれてもはやされているが、実はどんなものやどんなことでも埋められない、心の孤独というものを抱えており、だからこそ、大胆な裸踊りを披露し、自分の肉体の美しさを強調することにより自己の存在を確認していたのではないだろうか。自分が何者であるかを問うこともなく、ひたすら孤独を抱えていた。その黒蜥蜴を執拗に追いかける明智との出会い。明智に対する黒蜥蜴の怒りや慄きは、明智との出会いを繰り返すことで、最終的には特別な感情に変化するのである。特別な感情を黒蜥蜴自身が認識することにより、抱いていた孤独が消え、明智によってもたらされた特別な感情をその手でつかむことができたのであろう。

「あたし、あなたの腕に抱かれていますのね……嬉しいわ……あたし、こんな仕合せな死に方ができようとは、想像もしていませんでしたわ」

黒蜥蜴が死に際に、明智に語った一言である。特別な感情を抱いた男に看取られることは仕合せなことである。しかし、それだけではない。自分の抱いていた孤独を打ち消し、自分の存在を確認できた明智との出会い、特別な感情を手に入れることのできた喜びがあるからこそ、黒蜥蜴は仕合せなのではないだろうか。

第二項 黒蜥蜴と雨宮潤一

初出の主要人物によると、雨宮潤一青年は以下のように紹介されている。

(二月号) 後に山川健作、黒衣婦人の番犬

(四月号) 恋敵を二人まで殺した拳闘家、緑川夫人の許に隠れて医学博士山川健作と変名している。

(五月号) 四月号と同じ。

(六月号) 医学博士山川健作とも偽名。恋仇を二人まで殺した拳闘家で黒蜥蜴の手下となっている。

(七月号) 六月号と同じ。

(八月号) 六月号と同じ。

(九月号) 医学博士山川健作とも偽名し、恋仇を二人まで殺した拳闘家くづれで、黒蜥蜴の手下となり、秘密船の事務長格としてあつかわれている。

(十月号) 黒蜥蜴の手下で医学博士山川健作とも偽名している。かつて恋仇を二人まで殺した拳闘家くづれ。

(十一月号) かつて恋仇を二人まで殺した拳闘家くづれで、黒蜥蜴の手下となり、医学博士山川健作とも偽名している。

更に、テキストでは、語り手によって、クリスマス・イヴの夜、潤一青年の様子が次のように語られている。

その舞台裏のように荒涼とした部屋の、片隅の椅子に、一かたまりのボロ屑みたいに、あわれに取り残されている若者があった。肩の張った派手な縞のサック・コートに赤いネクタイ、どこやらきざな風体の、拳闘選手のように鼻のひしゃげた、筋骨たくましい、一くせありげな男だ。それが風采に似合わず、クシユンとしおれかえつてうなだれているものだから、ついボロ屑にも見えただけだ。

初出の人物紹介と語り手の紹介を踏まえると、潤一青年は拳闘家ではあったが、何かしらの事情により拳闘家くづれとなってしまった。そして、暗黒街で一くせあるようなことをして稼ぎを得ていたのである。拳闘家くづれとなった潤一青年は、ある日黒蜥蜴の窮地を救い、黒蜥蜴の恩人となる。つまり、潤一青年と黒蜥蜴の関係は、対等もしくは潤一青年のほうが若干上であると考えられるだろう。ここまでは、クリスマス・イヴ以前に起こったという設定で、小説は進んでいく。

「ええ……マダム、あんたはいつも、僕を恩人だといってくれますね」／「そうよ。あの危ない場面を救ってもらったのだから。あれからあたし、潤ちゃんの腕っぷしにほれこんでいるのよ。」

潤一青年が以前、黒蜥蜴の「危ない場面を救う」たことが分かる会話である。黒蜥蜴はこの後、潤一青年という人間を消してしまうというトリックで、潤一青年に恩を返す。潤一青年は、恩を返してもらった結果、なぜか黒蜥蜴の手下となる。

そもそも、黒蜥蜴が遭った危ない場面とは、どんな場面だったのか。危ない場面は黒蜥蜴による自作自演だったのではないだろうか。なぜなら黒蜥蜴は、以前から拳闘家くづれの潤一青年を手下にしようと考えていたからである。潤一青年に危ないところを助けてもらったという行為は、実は黒蜥蜴による策略であり、潤一青年は、黒蜥蜴の策略にはまった結果、手下にならざるを得ない状況に陥ってしまったのである。

拳闘家くづれの腕っぷしにほれこんでいた黒蜥蜴は、潤一青年を高く評価している。

「G街の英雄が弱音をはくわね。(中略)」

黒蜥蜴にとって、潤一青年は、G街の英雄なのである。G街の裏通りである暗黒街において、潤一青年も名の知れた男であるのだろう。そんな潤一青年も、クリスマス・イヴの夜に恋敵を二人殺してしまうが、「捕まったらおしまいです……僕はもう少ししゃばにいたいんです。」と黒蜥蜴に話し、助けを乞う。潤一青年は、自分の犯した殺人という行為におびえ、警察に捕まりたくという恐怖におそわれる。潤一青年は黒蜥蜴に貸しがあるのだから、助けてもらっても対等な関係でいられるはずであ

るが、なぜか黒蜥蜴に助けてもらったと同時に手下になってしまう。

潤一青年は、死骸なぞよりも、彼の救い主の黒衣婦人が恐ろしくなった。

雨宮潤一という人間消してしまうために、替玉の死体を探す場面での語りである。潤一青年は黒蜥蜴の取る行動に圧倒される。死体を運び、それを使って一人の人間を消してしまうという、大胆で恐ろしい行為に見とれ、黒蜥蜴の恐ろしさを感じてしまう。

闇のなから女性の声が叱りつけた。叱りつけられると潤一青年は、一種異様の威圧を感じて、心がしびれたようになって、猫の前の鼠みたいに、ただ彼女のいうがままに動くほかはずなかつた。

黒蜥蜴が「よほどの大悪党」であることを知り、黒蜥蜴の本性である「一種異様の威圧」を感じてしまった潤一青年は、ただ黒蜥蜴の言うがままにしか動けなくなってしまった。つまり、潤一青年は助けられただけでなく、黒蜥蜴の本性を知ってしまったがために、その得体のしれない魅力に取り付かれてしまったということなのだろう。だから手下となってしまったのである。黒蜥蜴からお金を借りて高飛びしていれば、黒蜥蜴の本性を知ることもなく、手下になることもなかったはずである。

このエピソードの後、雨宮潤一という青年は山川健作となり、黒蜥蜴とともにKホテルの客となる。

「潤ちゃん、あんたは死んでしまったのよ。それがどういふことかわかる？つまり、今ここにいる、あんたという新しい人間は、あたしが産んであげたも同じことよ。だから、あんたは、あたしのどんな命令にだつてそむくことができないのよ」／「もしそむいたら？」／「殺してしまふまでよ。あんた、あたしが恐ろしい魔法使いつてこと、知りすぎるほど知ってるわね。それに、山川健作なんて人間は、あたしのお人形さんも同じことで、この世に籍がないのだから（中略）あたし、きょうからあんたという、腕っぷしの強いお人形さんを手に入れたのよ、お人形さんて言う意味は、つまり奴隷、ね、奴隷よ」／「ええ、僕は甘んじて女王様の奴隷になります。（中略）そのかわり、あなたの産んだ児を見捨てないでください。ねえ、見捨てないで」

黒蜥蜴と潤一青年の関係は、対等ではなく、完全に主人と奴隷になっている。雨宮潤一という人間を消してしまつた夜から、もはや「潤一青年は、この妖魔にみいられてしまつたのである。そこには今までの、「G街の英雄で大きな風体の拳闘くづれの潤一青年」は存在しない。「雨宮潤一という人間を殺してしまうのよ」という黒蜥蜴の言葉は、言葉のとおり潤一青年の存在そのものを、潤一青年の中からも消してしまつたのではないだろうか。存在がなくなつてしまつた潤一青年は黒蜥蜴の奴隷となることで、自分の存在を確認し、今ここにいる必要性を感じることが出来るのではないだろうか。だからこそ「ねえ、見捨てないで」と懇願するのである。

黒蜥蜴と潤一青年の関係について考えると、一見、黒蜥蜴が母親的存在で潤一青年が子供の様にも読み取れるが、私は、黒蜥蜴はあくまで「主人」であり、潤一青年は「奴隷」であると考えている。黒蜥蜴自身は潤一青年に向かって「産んであげた」とは言つても、「子ども」だとは言つていない。「黒天使は、やさしくほほ笑んで、（中略）子供でもあやすように」という表現から「母親的存在」と連想できないこともないが、しかし、黒蜥蜴自身は完全に「奴隷」と言い切つており、さらに、「きょうからあんた、あたしの一の子分よ」と言つていふことから、黒蜥蜴は「母親」といふ存在にはなりえないだろうと考える。潤一青年も、「あなたの産んだ児を見捨てないで」と泣きつくが、その後で「僕はあなたの奴隷です」と「指にギョツと力をこめ」て語る。「母親的存在」の黒蜥蜴に「奴隷です」と言い切るのはつじつまが合わないように感じられる。黒蜥蜴と潤一青年は、対等関係から主人と奴隷の関係になるのである。

第二節 桜山葉子

『黒蜥蜴』の中で明智のトリックを支える重要な役割をする人物、それが桜山葉子である。しかし、彼女は今までその存在を深く研究されることはなかった。それは、彼女の役割が替え玉であることから、語り手が彼女に関して語る内容が「騙り」だったことが考えられる。更に彼女が桜山葉子として登場する場面が「怪老人」の章のみ（終末で、明智が替え玉のトリックを告白する場面も）であり、この章がこの小説にとつて非常に異質な部分であることも一つの理由である。ここでは、「怪老人」の章を踏まえながら、桜山葉子に焦点を当て考察していく。

桜山葉子は早苗の替え玉として小説に登場する人物である。「会社をクビになり無職であり、両親、兄弟といった身寄りはいない。年齢は早苗さんと同じくらい。」ということが、初出の登場人物紹介の中でされてはいるが、生い立ちやその容姿についての詳しい叙述はされていない。黒蜥蜴同様、謎の多い女性である。この桜山葉子が明智扮する怪老人と雇傭契約を結ぶのである。「怪老人」の章によつて詳細は騙られるのだが、この章は小説を読み進めていく上で必要不可欠の章であり、結果的にこの章が存在することにより、読者が語り手に欺かれていくのである。そもそも、「怪老人」という章のタイトルのはずであるが、語り手は次のように語っている。

さて、読者諸君、作者は、ここに舞台を一転して、今までこの物語に一度も現れなかった一人の女性の、不思議な経験を語る順序となった。

つまり、これから進んでいく物語の主人公は、怪老人ではなく、今までこの物語に一度も現れなかった一人の女性なのだと言語手は語っているのである。更に語り手は、

それは黒蜥蜴や早苗さんや明智小五郎とは、なんの関係もない事柄のように見えるかもしれない。しかし、敏感な読者は、この一女性の奇異な経験が、事件に関してどんな深い意味を持っているかを、容易にさとられるに違いない。

と読者に向かって語りかける。「黒蜥蜴や早苗さんや明智小五郎とは、なんの関係もない」とあるが、語り手はこの一文で、きつと何か関係があるのだろうという推測を、読者にさせるのではないだろうか。あらかじめ読者に事件性を示唆させる、語り手のトリックであろう。怪老人はこの後、この不思議な女性についての説明を始める。本来であれば、語り手によつて葉子の身の上が語られてもいいはずなのだが、葉子についての情報は、怪老人と葉子自身によつて明らかになっていく。

「フフフフ、あなたのちつともご存じない老人じゃ。だが、わしの方では、あなたのことを少しばかり知っているのですよ。いってみようかね。あなたの名前は桜山葉子、関西商事株式会社のタイピスト嬢であったが、上役と喧嘩して、きょう首になったばかりじゃ。ハハハハハ、どうだね。当たったでしょう。」

ここから、葉子に関する情報が、怪老人によつて語られる。

「まだある。あんたはきょう三時頃に会社を出てから今まで、一度も家へ帰っていない。友だちを訪問しようもしない。ただブラブラと大阪の町じゅうを歩き廻っていた。一体これからどうするつもりなんだね」／老人は何もかも知っている。

怪老人は、葉子について「何もかも知っている」のである。すべてではないかもしれないが、少な

くとも午後三時から夜ふけまで、ずっと葉子のことを尾行し続けていたのである。尾行されていることに気づいていた葉子は、喫茶店に入りコーヒーを二つ注文する。

「おじさん、きつといらっしやると思っつて、あたし、コーヒーを注文しておきましたよ」／娘が老人の倍の大胆さで応酬した。

葉子は大胆な女性なのである。それも「老人の倍」ということは、時と場合によつては明智よりも至極大胆な振る舞いもできるといふことだろう。喫茶店で老人は葉子に対して「あんたはわしに雇われてくれますか」と尋ねる。

「ごめんなさい。それ、ほんとうですか？」／やつと葉子にも老人の真意がわかりはじめた。

老人は、月給や宿所、服装を負担すること、仕事内容は「ただ遊んでいればいい」と葉子に話す。そして、葉子から両親について聞きだし、葉子が住んでいるアパートは「あとからわしの方でよろしく話しておく」と告げる。

実に奇妙な申し出であった。普通の場合なれば、とうてい承諾する気にはなれなかつたに違いない。だが、桜山葉子はその時、貞操さえを売ろうとしていたのだ。自殺をさえ考えていたのだ。そのやけっぱちな気持が、つい彼女をうなづかせてしまった。

「やっけばちな気持」だけでなく、葉子がおかれている現在の状況、葉子の気性、すべてが相まって、彼女はうなづいたのだろう。このあと、怪老人は喫茶店を出て、タクシーを拾う。怪老人と一緒にタクシーに乗り込んだ葉子は、「老人からこの不思議な雇傭契約の秘密がある程度まで聞かされ」ることとなる。つまり、自分の「奇妙な役割」について知ることとなるのである。そして葉子は、老人の言うとおりに着替えをすませ、上品な洋髪のかつらをかぶり、その容貌が「おやつと思うほど」変わってしまう。そして、老人の言うがままに、一台の自動車に乗る。

「さあ葉子さん、用意をして、素早くやるんだよ。いいかね」／老人が競技選手を力づけるようなことをいう。／「ええ、わかつてますわ」／葉子はこの不可思議な冒険に、わくわくしながら、しかし元気よく答えた。

葉子が、「不思議な経験」「奇異な経験」だけでなく、「不可思議な冒険」をもするのだと語り手は語っている。一体どのような経験・冒険をするというのか。

葉子はもう一人の葉子を見たのだ。むかし離魂病という病があったことを聞いている。もしかや彼女は、その奇病にとりつかれたのではないだろうか。

ここまでの展開から考えると、何が「不思議な経験」で、「奇異な経験」になるのかが、よく理解できない。得体のしれない老人に自分の身边を探られ、「不思議な雇傭契約」を結ぶことが、「不思議な経験」で「奇異な経験」なのだろうか。それとも、「もう一人の葉子を見た」のが「不思議な経験」なのだろうか。そうすると、語り手の言う「不可思議な冒険」というのは一体どのようなことになるのか。

「経験」とは、「実際に見たり、聞いたり、行ったりすること。」であり、「冒険」とは「危険を冒して行くこと。成否の確実でないことをあえて行くこと。」である。(以上、『日本国語大辞典 第二版』小学館 より) 言葉の持つイメージから、より時間的に短いのが「経験」であり、ある程度ストーリー

一性を持ち、時間的に長いのが「冒険」だとして、語句の意味と合わせてこの場面を検証してみる。「ちつともご存じない老人」に突然雇われ、着替えを実際に行い、自動車を降りた先で、自分にそっくりな人間を実際に見たことが「不思議な経験」であり、「奇異な経験」となるのであろう。そうすると、「不可思議な冒険」というのはどんなことを指すのか。この後に続く「クモと胡蝶と」の章からの出来事、つまり、語り手によって、「早苗として語られる葉子」についての出来事がすべて、「不可思議な冒険」となるのではないだろうか。岩瀬家の通用門でもう一人の葉子を見たときから、葉子の不可思議な冒険は始まるのである。「令嬢誘拐」の章で人間椅子のトリックによって誘拐されるという危険な目に遭うことは、葉子にとつての命がけの「不可思議な冒険」であり、黒トカゲの船で監禁されることや、アジトで真っ裸にされ香川青年と共に牢に入れられること、「クモと胡蝶と」以降の章で、早苗を中心として物語が進められている章はすべて、葉子が、確実ではない明智の助けを待ちながら、危険を冒して行う「不可思議な冒険」について語られていると考えられるのである。

葉子は明智と出会う前に、どのような境遇に置かれていたのだろうか。「不思議な雇用契約」をいとも簡単に結んでしまう葉子の心情について考察してみる。

もともと両親が亡くなってしまう葉子が「孤独」という感情を抱いていてもおかしくないと考えられるだろう。そのうえ、会社という自己認識の場を失った葉子は、一層強く孤独を意識したのではないだろうか。だからこそ、自暴自棄になり睡眠薬を二瓶購入し、自殺を考えるのである。

怪老人に後をつけられていることに気づいた葉子は、喫茶店に入る。

「おじさん、きつといらつしやると思つて、あたし、コーヒー注文しておきましたよ」／娘が老人の倍の大胆さで応酬した。

前述した通り、葉子は大胆な行動をする女性なのである。そもそも、一人のタイピストが会社の上司と大喧嘩すること自体が、非常に大胆な事ではないか。後に明智も葉子の大胆さを認め、「不良娘なればこそ、この大芝居をまんまとしこなすことができた」と評価している。

葉子はこの不可思議な冒険に、わくわくしながら、しかし元気よく答えた。

ここでいう「冒険」というのは、葉子が早苗の替え玉となり黒蜥蜴に誘拐されるということである。はじめは怪老人として葉子に近づいた明智であったが、移動するタクシーの中で自分の事がある程度話したのであろう。職を失った葉子にとつて、あの有名な明智探偵と雇傭契約を結ぶ事は非常に幸せな事であり、またその大胆さも手伝つて、自分に与えられた「奇妙な役割に興味を持つ」ことができたのである。葉子は、その役割を果たすことが自分の命題であるかのごとく感じただろう。

葉子が、明智という存在を必要としていたと気付かされる表現が、小説の中で描写されている。明智を海に抛りこんだことを改めて認識した黒蜥蜴と、黒蜥蜴によつて明智が海に抛りこまれたことを知った早苗（葉子）は、二人手を取り合い、悲しみにくれる。

泣きに泣いて、女賊の胸に日頃の邪悪が目覚めるまで、早苗さんの心に敵愾心が湧きあがるまで。

黒蜥蜴にとつてのみならず、葉子にとつても明智が大きな存在であったことがわかる表現である。葉子が一番信頼をおける存在、それが明智であったのだ。

孤独を抱え心満たされずひたすら自暴自棄となり、自殺に向かって突き進んでいた葉子は、明智との出会いによって何かを得ることの喜びを知り、誰かから必要とされている喜びを味わうことができた。つまり、孤独から解放されたのであろう。明智という存在は、葉子の人生を劇的に変えるツールとして用いられ、葉子という存在は、明智の推理を大胆に演出するツールなのである。

ところで、桜山葉子を早苗の替え玉として岩瀬家に潜入させ、黒蜥蜴に対してトリックを仕掛ける明智であるが、なぜわざわざ「怪老人」に変装して葉子に近づく必要があったのか。「怪老人」の章について、考察をしながら、解釈する。

読者諸君は、この物語のはじめの方の「怪老人」という一章を記憶されるであろう。名探偵明智小五郎のぎまん作業は、実にあの時に行われたのであった。怪老人はつまり明智の変装姿にほかならなかった。

「再び人形異変」の章で語り手が語る場面である。怪老人＝明智小五郎という図式が完成する。つまり、怪老人の行動はすべて明智の行動だったのである。

ここで、怪老人が明智であるという前提のもと、怪老人の言動を考察してみる。

茶色のソフトに、厚ぼったい茶色のオーバー、太い籐のステッキ、大きなロイド目がね、髪もひげも真っ白なくせに、テラテラとした赤ら顔の、気味のわるい老紳士だ。

見事な変装である。この後明智は、売店の店主、火夫の松公、潤一青年と変装することとなる。明智は、黒蜥蜴に負けず劣らず変装の名人である。青年紳士に変装して逃げた黒蜥蜴に対してのライバル心からか、明智自身も変装という手段で、黒蜥蜴を欺こうとする作戦なのだろうか。また、変装することによって、自分の足取りやトリックを黒蜥蜴に悟られないようにする目的があるのかもしれない。黒蜥蜴には大勢の部下がいるのだ。もちろん、岩瀬邸の近くにもいると考えられる。また、明智の行動を逐一観察して黒蜥蜴に報告する部下がいてもおかしくはないだろう。つまり、替え玉となる葉子との接触を黒蜥蜴に悟られないよう変装したのだ。そしてその後には仕掛ける替え玉のトリックのタネを割らないためにも、変装して葉子に近づく必要があったのである。

怪老人は、喫茶店で葉子と差し向かいで話をする。

「フッフッフ、あなたのちっともご存じない老人じや。だが、わしの方では、あなたのことを少しばかり知っていますのですよ。」

と怪老人は語るが、しかし、その後すぐに語り手が次のように語っている。

老人は何もかも知っている。彼はきつと、その午後三時から夜ふけまで、ずっと葉子を尾行していたのにちがいない。

語り手の言葉を信用すれば、明智は「少しばかり」ではなく、葉子についてかなりのことを知っていたことになる。「ホテルの客」の章における明智と、似たような行動である。口先では適当なことを言っただけで（または読者を欺きながら、実はその裏で多くの手を講じている。「ホテルの客」の章では、黒蜥蜴扮する緑川夫人に対して、「こんどのことも、僕は不良少年かなんかの、いたずらではないかと思っただけですよ。」といいながらも、聞き込みをしたり、部下をホテルに待機させている。同様に、「少しばかり知っている」と言っただけで葉子を驚かせるが、実はかなりのことを知っているのである。明智の、本当は知っているのに知らないふりをするという、そのない様子と、そして、いろんなことを用心しながら行動していくことができる臨機応変な様子が解釈できるだろう。

葉子と喫茶店で会話する中に、葉子が薬屋でアダリン（眠り薬）を購入していたことを知っていると明智は語る。

「あたしが自殺するとしてもおっしやるの？」／「ウン、わしは若い女性の気持が、まんざらわからぬ男じゃない。おとなたちには想像もできない青春の心理じゃ。死が美しいものに見えるのじゃ。けがれぬからだで死んで行きたいという処女の純情じゃ。そしてお隣には、やけっぱちな、われとわが肉体を泥沼へ落としこもうとするマゾヒズムがいる。ホンの紙一重のお隣同士じゃ。あんたがストリート・ガールなんて言葉を口ばしるのも、アダリンを買ったのも、みんな青春のなせるわざじゃよ。」

自殺をすることが若者にとって「青春」だの「美しいものに見える」と語っているのだろうか。なぜ処女だとわかるのか。実は葉子が本当は純情な女性だということを書いたのか。上手いことを言つて、葉子を自分の語りに引きこませようとする明智の話術のように考えられる。このあとも、巧みに話を持ち掛け、葉子を早苗の替玉として利用しようとする魂胆が見られる。そして、極め付けに、

「(中略) あんた、両親は？」／「ありません。(中略)」／「すると、今は……」／「アパートに一人ぼっちですの。」／「ウン、よしよし、万事好都合じゃ。それでは、あんたはこのまますぐ、わしと同道してくださらんか。アパートへは、あとからわしの方でよろしく話しておくことにするから」

老人と葉子の会話により、葉子が天涯孤独だということが明らかになる。身寄りもない葉子に対して、「万事好都合じゃ」というのは、最悪の場合、早苗の身代わりとして死んでも構わない女性が見つかったという、明智の本心からの言葉であると解釈できるのではないだろうか。また、アパートも適当に引き払ってしまった問題ないという考えもあるのではないだろうか。替玉を使って黒蜥蜴を欺こうとするためには、天涯孤独の女性が一人犠牲になっても仕方がない、という明智の考えなのだろうか。非常に利己的で、冷酷ではないかと考える。一人ぼっちで身寄りもなく、自殺も考えている葉子の存在は、ぎまん作業を行う明智にとっては、「万事好都合」であり、葉子は明智にとって、一つの替玉という物としての存在価値しかないであろう。その根拠となりうるであろうことを、「再び人形異変」の章で、明智は黒蜥蜴に対して語る。

「二人になったんじゃない。ここに誘拐されてきた早苗さんはせものなんだよ。早苗さんの替玉を探すのに僕はどれほど骨を折つたろう。むろん無事に助け出す自信はあった。だが親友の一粒種を、そんな危険にさらす気にはなれなかったのね。君が早苗さんと信じ切っていたあの娘はね、桜山葉子という、親も身寄りもない孤児なんだよ。(中略) 葉子はあるに泣いたりわめいたりしながらも、僕を信じ切っていた。僕が必らず救い出しにくるということを、確信していたのだよ。」

明智は、本物の早苗さんを危険にさらしたくはなくても、親も身寄りもない孤児なら、万が一殺されたとしても大丈夫だろうと考えていたのではないか。早苗の替え玉を探すことがなぜ大変か。明智の変装術をもってすれば、どんな女性でも、その容貌を似つかわしくすることが可能ではないのか。大変な理由はその容貌ではなく、万が一殺されても特に影響のない女性を探さなければならなかったからであろう。早苗を無事に助け出す自信はあるが、万が一ということを考えて、替え玉を使ったほうが得策だと明智は計算したのだ。そのために、この世から存在しなくなっても大丈夫な女性を探すことが大変だったのである。だからこそ葉子の存在は「万事好都合」であったのだ。また、明智は「葉子はあるに泣いたりわめいたりしながらも、僕を信じ切っていた。」と語るが、自分を信じ切らせる巧みな話術で葉子の気持ちをつかみ、それを利用してというようにも解釈できる。さらに、早苗の事を「親友の一粒種」と語るが、そもそも明智と岩瀬氏は親友であったのか。岩瀬氏がかつて店の盗難事件を依頼した、ビジネス上のドライな関係なのではなかったか。明智も語り手と同様、実

は騙る男なのである。
「怪老人」の章で、最後に明智は、自分の利己的感情や冷酷さをさとられないよう、葉子に声をかける。

「さあ葉子さん、用意をして、素早くやるんだよ。いいかね」／老人が競技選手を力づけるようなことをいう。／「ええ、わかってますわ」／葉子はこの不可思議な冒険に、わくわくしながら、しかし元氣よく答えた。

葉子を励ましているように捉えられる明智の言葉に聞こえるが、実は、自分の欺瞞作業を成功させるためにうまく働いてくれ、と語っているようにも解釈できる。明智にとつての葉子は、自分が果たす目的に適った条件を備えた女性であり、「早苗の替え玉」という物でしかないのかもしれない。明智が怪老人に変身したのは、葉子に対してではなく、葉子と接触を持ったことを世間に知られては困るからではないだろうか。明智は名探偵として世間に顔を知られている人物である。替え玉のトリックとして葉子と明智が接触したことをもし誰かが知っていたらどうなるのか。葉子に何かがあった場合、自分に疑いがかからない様に、わざわざ怪老人に変装して葉子に近づいたのである。

そもそも、替え玉を使って敵を欺き、捕えることは、探偵として取るべき方法にふさわしくはない。ましてや、その替え玉に素人を使うことは言語道断であろう。本来であれば、探偵は俯瞰的立場で事件を見下ろし、部下を使う、いわば司令塔である。しかし、明智自身は黒蜥蜴の船に乗り込み、一間違えば自らも命を落とすような行動をとっている。明智はなぜこのような行動に出たのか。

明智はホテルで黒蜥蜴に敗北を喫して以来、黒蜥蜴に対して強い闘争心を燃やしていた。部下に対しても、黒蜥蜴に対しても腹が立っていた。黒蜥蜴への復讐を考えたもおかしくないほど、明智は心理的に追い詰められたはずである。心理状態が不安定であるが故の替え玉作戦なのである。もはや明智は正義感あふれる名探偵ではないのである。だとすれば、この『黒蜥蜴』という小説は、黒蜥蜴に対する明智の復讐譚であると考えることもできよう。

桜山葉子という女性は、怪老人に扮する明智によって冒険を仕組まれた。その冒険が、明智の利己的欺瞞作業であるのか、それとも違うのか。冒険を依頼された葉子には知る由のないことである。しかし、葉子にとつてこの冒険は、確かに危険ではあるが、退屈から逃れられるほど「わくわく」するものであり、自分の不安な状況を改善するものであることは間違いない。そして明智の信頼に応え、替え玉を貰き通すことで葉子が大きな達成感味わったことも間違いないだろうと考察する。

第四章 作品をめぐる

第一節 構成

資料を参考にすると、この小説は非常に時間に対する捉え方が粗雑で、時間進行に矛盾が発生していることがわかる。作品中の時間が一日ずれているのである。なぜこのような矛盾が生じるのか。『黒蜥蜴』の自註自解には時間の進行については何も触れられていなかった。乱歩自身も小説中の時間設定が狂っていたことに気づかなかったのではないだろうか。そこで、昭和五年九月から翌六年三月まで「報知新聞」に連載した『吸血鬼』の自註自解を参考にする。

私の小説は講談社の雑誌で好評を博していたので、「報知新聞」社長になった野間さんから再三懇願され、断りきれなくなつて、例によってハッキリした筋もないままに、無理に書きはじめたものであった。探偵小説というよりは、怪奇、残虐、冒険活劇の物語で、筋の運びかたは、やはり

ルパンふうを狙っていたようである。

乱歩自身、『吸血鬼』を書いたころの自分のことを「例によってハッキリとした筋もないままに」と評価している。ハッキリした筋がないということは、とにかく書いているうちに何とかなるだろうと考えて小説を作っていたということである。同じように、ハッキリした筋がないまま『黒蜥蜴』を書きはじめたと考えてみる。そこには時間を計算してストーリーを展開させることや登場人物の年齢や風貌を一致させるといった緻密な計算は皆無なのである。また、「無理に書きはじめた」小説であるから、書きあげたあとを振り返る時間もなく（あるいは乱歩自身、駄作と考えて振り返ることを嫌うのか）小説が世間の目に触れることになる。そこではじめて時間進行がずれていたことに気づくのではないだろうか。しかし、当時の読者にしてみれば時間の進行などは気にするに値しないことがらであったのだろう。それよりも、毎月繰り広げられる「黒蜥蜴と明智の駆け引き」に読む価値を認めていたはずである。ハッキリした筋がないまま書きはじめても、多少時間がずれていても、結果としてその小説が大衆に受け入れられれば、その小説は上手くできた物となりうるのではないだろうか。つまり、大衆に受け入れられることによって、その矛盾も許されるのだと考察する。

昭和七年三月から昭八年十月までの休筆を経て、乱歩は雑誌「新青年」八年十一月から『悪霊』を連載開始する。八年十二月、九年一月と、三か月連続で「新青年」に連載したのだが、九年二月、三月とも原稿締め切りが間に合わず、休載となる。九年四月号に「悪霊についてのお詫び」という文章を掲載する。これをもって、『悪霊』は中絶作品となった。しかし、同時期に雑誌「キング」に連載された『妖虫』、「日の出」に連載された『黒蜥蜴』、「講談倶楽部」に連載された『人間豹』は中絶されることがなく完結している。

『悪霊』を中絶せざるを得ない状況になったのはなぜか。乱歩自身が『探偵小説四十年』において、次のように語っている。

私はそれまでに、もっと一般的な娯楽雑誌には、度々長編連載をやっていたが、それらの長編は皆、感興が湧こうが湧くまいが、筋があるうがなかるうが、ともかく書きはじめたものばかりであった。（中略）だから、とも角も書きはじめるのは、何も今更らじまったことではないのだが、私は一種の迷信のようなものを持っていて、せめて探偵小説の本舞台である「新青年」だけにはそんなことをしたくないという考えを、頑固に持ちつづけていたので、ともかく書きはじめなければならなくなったときの苦痛は、他人には想像の出来ないようなものであった。

そういう出発の仕方が無理にはじめたのだから、ろくなものができる筈はない。その長編「悪霊」は昭和八年十一月号から翌年正月号まで辛うじて書きつづけたが、そこでパツタリ行きつまってしまった。

ともかくにしろ、雑誌が新青年なのだし、それに推理のある探偵小説を書くつもりだったので、いくら私でも凡その荒筋は持っていた。だが、その細目までは出来上がっていき、書いて行くにつれて、色々の矛盾が生じ、それを克服できなかつたばかりか、それまで書いた部分を読み返して見ると、われながら少しも面白く感じられないので、私の癖の熱病のような劣等感におそわれ、どうしても書きつづけられなくなつてしまったのである。

乱歩にとって、「新青年」という雑誌は、文学同人誌的存在であり、「キング・日の出・講談倶楽部」のような娯楽雑誌とは一線を画するものであった。しかし、『悪霊』という作品に取り組み、行き詰まり、中絶することで、本格探偵小説家としての力量が自分自身にはないのだということを「新青年」によって乱歩は思い知らされたのではないだろうか。また、そのことにより自分の作品スタイルは「冒険趣味」的な要素を取り入れたものであるのだと確信したのではないだろうか。乱歩は、娯楽雑誌に小説を連載することについても言及している。

それらの雑誌の長編は、「新青年」とはちがって本格ものでは却って困るのだし、全体の筋立てが出来ていなくても、実をいうと全体としての一貫性なんかはどうでも、毎月毎月が面白く読めることを、読者も編集者も歓迎するという種類の雑誌なのだから、私は「新青年」ほど神経質にならないで、もつと楽な気持で書きはじめたつもりであった。(中略)筆を執る直前までは売文業者の気持になっているのだが、原稿紙に向うや否や俄然、私の二重人格のもう一つの性格が顔を出して、営業家としての息を沮喪せしめる。

右の引用から考察すると、雑誌「日の出」に連載されていた『黒蜥蜴』は、「全体の筋立てが出来ていなくても、実をいうと全体としての一貫性なんかはどうでも、毎月毎月が面白く読める」作品の一つとして存在しているということになる。『黒蜥蜴』の中で日付に誤差が出てくるのは一貫性のなさを実にあらわすこととなり、たとえいろいろな矛盾が生じたとしても、それは娯楽雑誌の許容範囲内であるという認識を、乱歩が持っていたということであろう。

話題を『黒蜥蜴』に戻して、引き続き構成について考察する。

通天閣での出来事は、黒蜥蜴にとってどのような意味を持つのだろうか。黒蜥蜴の、今回の犯罪目的と関連付けて考えてみる。

「この世の美しいという美しいものを、すっかり集めてみたいのがあたしの念願なのよ。宝石や美術品や美しい人や……」／「え、人間までも？」／「そうよ。美しい人間は、美術品以上だわ。(省略)」

右の引用から、黒蜥蜴にとって最初の目的は、岩瀬氏の娘をあらかじめ誘拐し、誘拐した娘を種に、岩瀬氏が所有する日本一のダイヤモンド「エジプトの星」を手に入れることである。しかし、kホテルでの計画が失敗したのち、黒蜥蜴の目的が多少変化したように考えられる。以下の引用を根拠にすることができるだろう。

「あなたはほんとうにかわいそうだと思うけど、日本一の宝石屋の娘さんに生れついたのが不運とあきらめてね。それに、あなたは、あんまり美し過ぎたのよ。僕は宝石も執心だけど、宝石よりも、あなたのからだがおほしくなった。決して断念しないわ。ねえ、明智さん、僕は断念しないよ。お嬢さんは改めて頂戴に上がりますよ。じゃ、さよなら。」

黒蜥蜴の犯罪目的は、「エジプトの星」を手に入れるだけでなく、同時に早苗さんをも手に入れることに変化していると考えられる。更に根拠となる引用を続ける。以下、早苗さんが人間椅子のトリックにより岩瀬家から誘拐された後の明智のセリフである。

「いや、決して殺すようなことはありません。kホテルの場合でもわかっている通り、あいつは生きたお嬢さんをほしがっているのです。」

以上の二点から考えても、黒蜥蜴は「エジプトの星」だけでなく、早苗さんも自分のコレクションに加えるつもりで今後の行動を計画すると考えられる。そして、早苗さんと「エジプトの星」を手に入れる取引場所として、通天閣を指定する。

なぜ通天閣なのか。他の場所(例えばどこかのホテルや遠くの娯楽施設)ではいけなかったのか。まず理由の一つとして、岩瀬氏の邸宅が大阪にあることが考えられる。早苗さんの誘拐後、間を置かずすぐに取引を成立させるためには、岩瀬氏の邸宅があり、自分の拠点もあろう大阪であると

都合が良いと考えられる。

もう一つの理由として、通天閣には喧騒と静寂があるからではないだろうか考える。

昭和初期、通天閣はその塔がメインではなく、遊園地の中の位置施設として存在していた。また、その遊園地が存在する「新世界」は一台歓楽街外として名高く、「人ごみにまぎれて逃走を図る」にはうってつけの場所であったと考えられる。また、塔の上は展望スポットであるが、取引が行われる時間になると「下界ではそれほどでもなかった冬の風が、ヒューヒューと烈しく頬を打った。冬の通天閣は不人気だ。それに夕方のせいもあって、展望台には一人の遊覧客も見えなかった。」状況になるのである。用心に越したことはないと考えている黒蜥蜴にしてみれば、静寂の中での取引の後、喧騒と人ごみの中にまぎれて逃げるといふ青写真は出来上がっていたのだろう。つまり、黒蜥蜴にとってみれば、通天閣が絶好の取引場所であるという概念があったのだろう。

そして、黒蜥蜴にはもう一つ、補助的な目的があったと考えられる。以下にその根拠となる部分を引用する。

「ええ、大阪でちゃんと予告してあるのよ。ああ、なんだか胸がドキドキするようだよ。明智小五郎なら相手にとって不足はない。あいつと一騎打ちの勝負をするのかと思うと、あたし愉快だよ。ね、潤ちゃん、すばらしいとは思わない？」

通天閣の取引でも、必ずどこかしらで明智が迫っているということを、黒蜥蜴は予想していたであろう。その明智が、静寂の中で迫ってくるのか、喧騒の中で迫ってくるのかまでは黒蜥蜴も予想しなかっただけで、いつか通天閣界限にいるうちに明智が迫ってくることは、気づいていたであろう。つまり、通天閣は、ホテルの場面で別れた明智と再会する場所なのである。明智と一騎打ちで勝負をしたいと考えていた黒蜥蜴にとって、通天閣は最高の舞台だったのである。

静寂の中で行われる取引が、黒蜥蜴にとってのいつも通りの行動、つまり日常であれば、そこに明智が迫っているという緊張感が加わると、非日常に変化すると考えられる。つまり、通常の取引だけでは飽き足らなくなった黒蜥蜴が、わざわざ非日常を作り出すために危険を冒して作り上げた舞台に選ばれたのが通天閣であろう。足元での喧騒は、黒蜥蜴にとっての日常に類似し、塔上の静寂は、黒蜥蜴にとっての非日常を比喻したものではないだろうか。

黒蜥蜴が通天閣から逃走する場面についても考察する。「塔上の黒トカゲ」の場面で、黒蜥蜴は金縁の目がねをかけた和服の婦人に変装し登場する。黒蜥蜴は通天閣の展望台に岩瀬氏を呼び出し、ダイヤモンドを手に入れ、この通天閣から逃走を図る。この場面の中で、展望台において他の人間に関する描写がない。

冬の通天閣は不人気だ。それに夕方のせいもあって、展望台には一人の遊覧客も見えなかった。
(中略) 何かこう、人界を離れて、天井の無人の境へ来たような、物さびしい感じであった。

この通天閣は、当時大阪に作られた「ルナパーク」という巨大遊園地の中に立てられた高い塔であり、通天閣と対峙するようにホワイトタワーといわれる塔も存在していた。さらに、通天閣とホワイトタワーはロープウェイで行き来できるようになっていた。本来であれば遊覧客で溢れかえっている場所なのである。しかし黒蜥蜴は、「冬の風が吹き込む夕方の遊覧客のいない、天井の無人の境のような物さびしい状況」を、宝石の引き渡し場所として、巧みに利用している。冬の通天閣の利用状況を調べていたのだろうか。非常に綿密な計画を前もって立てていたであろう。さらに、

欄干にもたれて、下界をのぞくと、ここさびしさとは打って変わった雑踏の、数千匹の蟻の行列

のような人通りが、足もとにくすぐったく眺められた。

通天閣を降りたところは、人が溢れ、活気のある街だということが考えられる描写である。宝石を受け取る場所は人目に付かず、宝石を受けとった後は人に紛れて逃走を図ろうと、黒蜥蜴は考えていたのである。十分に下調べをしてから計画を実行に移していると考えられるならば、黒蜥蜴という女性には、非常に頭脳的な行動力に長けた女賊と考えられる。

「(中略) ……では、お先にお引取りを、わたくし、一と足あとから帰らせていただきます。」

岩瀬氏が先に通天閣から下りるよう促すことで、岩瀬氏に後をつけられないよう、先手を打っているであろう。さらに

「ええ、そうです。あれはわたくしの部下でございますのよ。ああしてわたくしたちの一挙一動を見張っていて、(中略) 賊などと申すものは、ちよつとした仕事にも、これだけの用意をしてかからなければならないでございますわ。」

岩瀬氏を先に通天閣から降ろすことや、挿絵からも読み取れるように、あらかじめ部下を配置して二人の行動を見張らせておくことから、黒蜥蜴の用心深さが読み取れるであろう。そして、奇妙な駆落が始まる。

相手には明智小五郎といういやなやつがついているのだ。あいつが、どんな知恵をしぼり、どんな恐ろしいことをたくらんでいるか、知れたものではない。彼女は双眼鏡を当てて、欄干からの群集を入念に眺め回し、熱心に調査した。

この場面で、黒蜥蜴は、通天閣の外側にいる人間に対しては、非常に用心深くしている描写がみられるが、通天閣の中にいる人間に対しては、それがまるでない。「やっぱりあの手を用いてやろう。用心にこしたことはありやしない。」あの手というのは、黒蜥蜴が通天閣の中にある売店のおかみになりすまして逃走を図るというものである。通天閣の中にある売店を営む夫婦も、実は黒蜥蜴の手下であったならば、この逃走手段は納得のいくものだが、この夫婦は赤の他人である。用心深い人間にしては、この黒蜥蜴の行動は非常に軽率なものに思われる。「用心にこしたことはありやしない」ではなく、今日、この場で初めて見つけた人間を利用して逃走を図るのは無用心ではないのか。

「ほんとうにすみませんけど、おかみさんに化けたあたしを、そのへんまで送ってくださいらないでしょうか。」

初めて会った売店の亭主にも、一緒に逃走してくれるよう頼んでいる。(この売店の亭主は、明智小五郎が変装していたのであるが、この明智の行動は、乱歩作品でよく用いられる手法であり、作品の展開を読者に予想させ、読者に期待を持たせる方法としては妥当であると考ええる。) 黒蜥蜴が本当に用心深いならば、このような行動は取らないはずである。あらかじめ通天閣から逃げる手筈をつけておくはずである。この場面の黒蜥蜴の行動は非常に軽率なように考えられる。先に岩瀬氏を通天閣のエレベーターから下に降ろす策はたててあっても、その後、黒蜥蜴自身がどのような方法を使って通天閣から降りるのかという策は、綿密には練られていないと考えられる。

二人は群衆をかき分けるようにして映画街を通り抜け、公園の木立のさびしい方へさびしい方へと歩いていった。

さびしい方へ歩いていったなら、黒蜥蜴は早急に亭主と別れて、手下の待つ車に乗り、逃走するはずである。しかしこの後に続く黒蜥蜴の台詞が、また疑問を感じさせる。

「ありがとう。もう大丈夫ですわ……まあおかしいわね。あたしたちまるで駆落者みたいじゃありませんか（中略）その男が女の手を引いて、人眼を忍ぶように、木立から木立をぬって、チョコチョコと小走りに道を急いでいたのだ。」

男と女が手をつないで小走りに急いでいる状況を想像すると、確かに駆落ちしているように周囲から見られるであろう。しかし、明智小五郎に捕まるかもしれないという恐怖に追い詰められている人間の心理としてはどうだろうか。自分たちの置かれている状況を冷静に判断した台詞なのだろうか。さらに、「……あなた、どうかなさいましたの、その包帯？」と、初めて会ったばかりの亭主の心配までしている。本当に用心深い盗賊であるなら、不用意な接触は避けるであろうが、何の目的があつて、この亭主との接触時間を長くしているのが疑問である。黒蜥蜴が本当に逃げるかどうかだけを考えていたのなら、手をつないで小走りに急ぎ、ある程度逃げ切ったところで終わるはずではないだろうか。この亭主との、別れを惜しむようなこの場面は、探偵小説としては明らかに異質である。

黒蜥蜴が、明智小五郎の裏をかき、自分の身を危険にさらしてまで明智と接触しようとする理由とはいったいなんだろうか。その理由は、「ホテルの客」の場面で黒蜥蜴が語る言葉にあると考える。黒蜥蜴は誘拐の目的を「その娘さんを種に、お父さんの持っている日本一のダイヤモンドを頂戴しよう」というように、潤一青年に語っている。そして、黒蜥蜴はさらに、自分の女賊としての美学を語る。

「ちゃんと予告して、先方に十分警戒させておいて、対等に戦うのでなくつちや、おもしろくない。物をとるといふことよりも、その戦いに値打ちがあるんだもの」

つまり、黒蜥蜴は、宝石の受け渡しに岩瀬氏が一人で来るはずがないと考え、必ず何かしらの形で明智が接触してくることを予想していたのである。「あいつが、どんな知恵をしぼり、どんな恐ろしいことをたくらんでいるか、知れたものではない」とあるように、明智のことを非常に用心していることから、この逃走方法を選んだのは、明智が売店の亭主に変装し、見張っていることを踏まえたいえで、明智と対等に戦うためであると考えられる。完璧な策をとるのではなく、あえて隙を作り明智が尾行しやすい状況を作ることで、女賊の美学を通そうとしたのである。明智にわざと接触を図ることで、己の女賊としてのプライドをかけて、明智との戦いを楽しもうとしたのではないだろうか。そして、万が一明智と接触しても、何らかの形で逃げるという自信が、黒蜥蜴にはあつたのではないだろうか。その根拠が「名探偵の敗北」という場面に描かれていると考える。この場面で明智は、黒蜥蜴を追いつめていながらも、取り逃がしてしまう。一度明智と直接対決をし、逃げ切っている黒蜥蜴は、もし明智と直接対決することとなっても、必ず逃げ切れると考えており、またそのために、自分の部下に行動の一部始終を見張らせていたのではないだろうか。

「奇妙な駆落者」は探偵小説の一場面としては余分な表現が多いと思うのであるが、この場面において、黒蜥蜴は明智の存在を相当意識していると考えられる。その意識が、名探偵と女賊というライバル意識なのか、明智に対する恋心なのかは、黒蜥蜴自身もまだはっきり断定できないであろう。しかし、明智のことを意識しているのは確かであると考ええる。探偵的要素だけでなく、黒蜥蜴の恋心を表現している伏線と解釈すれば、余分な表現が多いことも納得できるのではないだろうか。実際に明智と接触する場面で、一番近距离で接触できるのが通天閣の場面である。この場面は黒蜥蜴の恋心にも似た感情を表現するために設定された場面だと考えられる。

第二節 挿絵

本論で単行本をテキストとしたのは、ここで考察する挿絵が初出のまま掲載されていたからである。挿絵があることでどのようなメリットがあるのか。それは、読者がよりリアルに登場人物や事件の状況を想像しやすくなるのではないだろうか。

一例として、黒蜥蜴が裸踊りをする場面を引用する。

彼女の美しく上気した全肉体を覆うものは、二た筋の大粒な真珠の首飾りと、見事なヒスイの耳飾りと、無数のダイヤモンドをちりばめた左右の腕環と、三個の指輪のほかには、一本の糸、一枚の布切れさえもなかった。(資料三A)

文字だけでは想像しきれない、黒蜥蜴の艶めかしさだけでなく、その周囲の状況、その場にいる他の人物、又その関わりも、挿絵があることにより、読者はよりはっきりとした映像としてイメージすることができるのではないだろうか。

明智は床にひざまづいて、その膝の上に女賊の上半身をかかえのせ、せめては断末魔の苦悩を味わってやろうと試みた。(資料三B)

「断末魔の苦悩」という言葉からは苦しみが想像されるが、挿絵が入ることにより、苦しみではなく、黒蜥蜴の表情が喜びに満ち溢れていることが読み取れる。

挿絵が入ることで、言葉から受けるイメージの補正もできるのではないかと考察する。『黒蜥蜴』という小説において、挿絵は読者のイメージをより具体的に映像化する手段として、必要不可欠なものであると考ええる。

挿絵作者の林唯一氏は、大正から昭和にかけての挿絵画家であり、主に少女雑誌や「婦人世界」に挿絵を描き、後に新聞小説にも挿絵を描いた人物である。

おわりに

私が江戸川乱歩について研究をしようと思ったきっかけは、自分の卒業論文の不完全さを後悔していたからである。卒業論文は非常に稚拙で、自分の考察は殆んど無く、先行研究と乱歩の自作解説の引用しかなかった。もっとしっかりと深く研究したいという願望が心の中で燻っていたのである。また、『黒蜥蜴』という作品は江戸川乱歩の原作を読んでいたにもかかわらず、三輪明広主演による舞台が自分の中で強烈にイメージされており、そのことに對しても自分で憤りを感じていた。そこで、大学院でもう一度しっかりと乱歩作品と向き合い、研究しようと考え、実行に移した。

いざ『黒蜥蜴』を読み込んでいくと、その面白さに打ちのめされたような気がした。いったいこの面白さは小説の何処から来るのだろうか。もっとこの小説を深く理解したいと思った。登場人物や構成、また他の小説との比較という観点を通して、この『黒蜥蜴』という小説が乱歩作品の中で特に「異質」な存在であることに気づいた。この異質こそ、推理小説嫌いの三島由紀夫をも虜にした、『黒蜥蜴』の魅力なのだと考えた。

研究そのものはまだまだ未熟であり、更に深く小説を理解する余地が残されている。今後、自らのライフワークとして、更に『黒蜥蜴』を深く研究し、納得のいくまでこの小説と正面から向かい合ってみようと考えている。最後に、文学の研究手法について一からご指導してくださった山本先生に心から感謝をして、このあとがきを閉じたいと思う。

山本先生、私が学生でなくてもご指導よろしく願います。

テキスト

・江戸川乱歩 『黒蜥蜴』 2008年12月 東京創元社

*テキストには江戸川乱歩『黒蜥蜴』創元推理文庫を使用した。単行本をテキストにしたのは、初出の挿絵が忠実に掲載されているためである。

《参考資料》

資料一 『黒蜥蜴』時間進行表

資料二 『黒蜥蜴』構成表

資料三 『黒蜥蜴』挿絵抜粋

参考・引用文献一覧

- ・雑誌『日の出』一月号～十一月号（三月号は休載）
- ・江戸川乱歩 江戸川乱歩全集第一巻～第三十巻 光文社
- ・三島由紀夫『三島由紀夫全集第三十巻』「黒蜥蜴」について 九七五年十月 新潮社
- ・三島由紀夫『三島由紀夫全集第三十五巻』関係者の言葉 一九七六年四月 新潮社
- ・読売新聞大阪本社社会部 編 『通天閣 人と街の物語』
- ・住田忠久 編 『明智小五郎読本』 二〇〇九年十月 長崎出版
- ・別冊宝島『僕たちの好きな明智小五郎』 二〇〇七年 宝島社
- ・新潮日本文学アルバム『江戸川乱歩』 一九九三年十月 新潮社
- ・新文芸読本『江戸川乱歩』 一九九二年四月 河出書房新社
- ・文藝別冊『江戸川乱歩』 二〇〇三年三月 河出書房新社
- ・三島由紀夫『黒蜥蜴』 二〇〇七年六月 学研M文庫
- ・松村喜雄『江戸川乱歩論 乱歩おじさん』 一九九二年九月 晶文社
- ・国文学解釈と鑑賞別冊『江戸川乱歩と大衆の二十世紀』 二〇〇四年八月 至文堂
- ・志村有弘編『江戸川乱歩徹底追跡』 二〇〇九年十一月 勉誠出版
- ・日本近代文学館 小田切進編『日本近代文学事典 第五巻 新聞・雑誌』 一九七二年十一月 講談社
- ・国文学『江戸川乱歩と夢野久作』 一九九一年三月 学燈社
- ・国文学解釈と鑑賞『江戸川乱歩の魅力』 一九九四年十二月 至文堂
- ・井上良夫『探偵小説のプロファイル』 一九九四年七月 国書刊行会